



追手門学院大学

成熟社会研究所 紀要

Center for Mature Society Research

第 10 号

2026.3



追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要

第 10 号 2026 年 3 月発行

目 次

論文

大学における生理用品設置に関する現状と課題
—追手門学院大学の事例を中心に— 長町理恵子 1

研究ノート

身体感覚を取り戻す学び
—背骨意識からひらくアクティブ・ラーニング— 今堀 洋子 11

講演記録

発酵食品と仕事づくり 神吉 直人 17

プロジェクトレポート

学生チームによる小豆島プロジェクトの活動報告 2025
—地域社会から「必要とされる存在」を目指して— 中川 啓子 29

活動報告

2025 年度の活動記録 43

論文

大学における生理用品設置に関する現状と課題

——追手門学院大学の事例を中心に——

長 町 理恵子

- I. はじめに
- II. 健康経営と生理用品備品化への取り組み
- III. 大学における生理用品の無償設置
- IV. 追手門学院大学の事例から
- V. おわりに

I. はじめに

近年「生理の貧困」への対策や、健康経営やウェルビーイング向上の視点から、日本国内で生理用品の備品化や無料配布の動きが広まっている。経済的な理由で生理用品を購入できない「生理の貧困」は、2020年の新型コロナウイルス感染拡大時に女性や親世代の就業が困難となり、生理用品が買えない女性が顕在化したことで知られるようになった。2021年に、日本の若者の5人に1人が生理用品の購入に苦労したという、任意団体「#みんなの生理」のアンケート結果をきっかけに、生理の貧困が社会課題であるという認識が高まった¹。

企業においては2010年代に「健康経営」への取り組みが始まり、新型コロナ以降は、社会でウェルビーイング(Well-being)²への意識も高まっている。

健康経営やウェルビーイングの具体的な取り組みの一つとして、職場、公共施設などにおける生理用品の備品化があげられる。企業では、女性特有の生理が女性の個人的なものであるという視点から社員の健康という視点での取り組みに移行している。トイレトペーパーと同様に生理用品を社内のトイレに無償設置する動き、女性の健康の知識の共有、男性も含めたジェンダー意識向上研修の実施などである(経済産業省, 2025)。

本稿では、IIで生理用品の備品化、無料配布に関する企業や自治体の取り組みを整理し、IIIで大学における生理用品の無償設置、IVで追手門学院大学の事例を取り上げる。Vのおわりに、生理用品設置や無料配布

の取り組みの意義、今後の課題と展望を考察する。

II. 健康経営と生理用品備品化への取り組み

2-1. 健康経営における女性の健康施策推進の考え方

経済産業省によると、「健康経営」は、従業員等の健康管理を経営的な視点で考え、戦略的に実践することであり、健康投資が従業員の活力向上や生産性の向上等の組織の活性化をもたらす、結果的に業績向上や株価向上につながると期待される、としている。健康経営は、日本再興戦略、未来投資戦略に位置づけられた「国民の健康寿命の延伸」に関する取り組みの一つである。山本他(2021)で、経済産業省や東京証券取引所の「健康経営銘柄」の表彰によって企業価値が高まる傾向が明らかとなるなど、健康経営と企業の価値や業績に関する研究が進んでいる。

近年、健康経営銘柄や健康経営優良法人の認定要件として「女性の健康保持・増進に向けた取り組み」が評価項目の1つとなっている³。労働基準法(第68条)では、「使用者は、生理日の就業が著しく困難な女性が休暇を請求した時は、その者を生理日に就業させてはならない」と定められている。実施できない場合には、罰金の規定⁴もある。会社には生理で休める制度があるが、実際には女性労働者のうち生理休暇を請求した者の割合は0.9%と、ほとんど取得していない、もしくは取得できないのが実態である(厚生労働省「令和2年度雇用均等基本調査」)。

経済産業省(2025)「これからの健康経営について」の「1 健康経営の可視化と質の向上」では、「女性の健康施策推進の考え方・取組例」に関する具体的な記述がある。ここでは、「女性特有の健康課題はデリケートで制度利用へのためらいもある点に配慮し、まず経営層からのメッセージ発信や管理職向け研修など、制度やサポートを利用しやすい体制・雰囲気醸成が必要」と明記されている。休暇制度には「生理休

暇」の他、「不妊治療休暇」「妊娠・出産休暇の延長」等が取り上げられている。これらの施策によって、女性従業員のパフォーマンス向上等が期待される。そのためには、ジェンダー意識向上のための管理者向け研修などの理解促進も必要としている。取組事例として、「CEOが生理痛体験会へ参加することで、経営層自ら女性の健康について理解を深め、会社全体の課題意識を向上」「カイロ、生理用品等の設置」などがあげられている。

経済産業省（2024）によると、女性特有の健康課題による社会全体の経済損失は、年間約3.4兆円だと推計されている。これは、性差に基づく多数の健康課題のうち月経随伴症、更年期症状、婦人科がん、不妊治療の4項目の合計を推計したものである。このうち「月経随伴症」による経済損失は約5,700億円であり、欠勤やパフォーマンスの低下が含まれるという。近年、女性の就業率の高まりから、企業における女性社員も増える中、女性の労働環境の整備や支援による女性の生産性の向上は、企業にとってもプラスに影響する可能性が大きく、企業が取り組むモチベーションにもなっていると考えられる。

2-2. 生理用品備品化・無料配布について

企業、自治体、学校などにおける生理用品の備品化や無償配布に注目してみよう。矢野経済研究所（2025）によると、2024年のフェムケア&フェムテック⁵（消費財・サービス）の市場規模は803億9,100万円である。2020年の599億4,800万円に比べると1.34倍に市場は拡大し、2025年は約10%増の888億6,000万円の見込みであるという。矢野経済研究所（2025）は、先述した経済産業省（2024）の約3.4兆円の経済損失の推計値について、国が明確に数字を示したという点で、フェムテック市場に与えるインパクトは大きいと指摘する。市場拡大の流れは、一過性の動きではなく、さらなる成長が期待されている。

地方公共団体が、「生理の貧困」に係る取組を実施している（実施した・実施を検討している）数は、2024年に926団体であり、全国で半数以上の自治体が「生理の貧困」への取り組みをしている（内閣府「「生理の貧困」に係る地方公共団体の取組（第5回調査2024年10月1日時点）」）。予算措置や防災備蓄、寄付等により準備した独自の取り組みの事例、地域女性活躍推進交付金等の交付金を活用した事例が多い。生理用品の提供方法として、社会福祉協議会や教育委員会との連携、民間企業との協定などがある。

生理用品の提供については、女子トイレなどで、有料で生理用品を購入できるディスペンサーが設置されていることがある。近年は、生理用品の備品化や無償配布は拡大しており、様々な形式がみられる。提供方法について整理してみよう。

第一は、スマホアプリと連動したディスペンサーによる無償提供である。2021年頃から、ベンチャー企業などによる民間サービスが普及している。無償提供サービスのしくみは、スマートフォンのアプリを起動し、トイレ内のディスペンサーと連動すると、1回につき1枚の生理用ナプキンが無料で受け取れるサービスである。トイレの個室内のデジタルサイネージ広告を視聴することで、無償提供が可能となるしくみだ。設置場所は、公共施設や商業施設だけでなく、企業や大学への導入も進んでいる。2026年2月現在、主要2社で全国に約500カ所、7,000台以上が設置され認知が拡大している⁶。スマホアプリとの連携やデジタルサイネージ広告は電子機器によって管理され、1枚ずつ提供されるなど利便性は高い。一方、故障や電波が届かず利用できないといった状況も起こり得るという（遠藤、2023）。

第二の方法は、手動のディスペンサーやボックスの設置による無償提供である。大阪大学の「MeWプロジェクト」は企業と連携して「MeWディスペンサー」を開発し、他の企業や大学だけでなく被災地や2025年の大阪・関西万博などでも導入・設置された。また、生理用品を製造販売する企業では、生理用品を入れる専用ボックスを無償提供し企業や学校などのトイレに設置するプロジェクトを実施している⁷。このプロジェクトは、2025年12月時点で企業・学校への導入は600以上に拡大しているという。専用ボックスに入れる生理用品は、各企業や学校が購入する。手動であるため、故障などの心配が少なく、災害時や場所を問わず設置でき、在庫管理や生理用品の購入費用など運用面は、導入する企業や学校が負担している。

第三に、企業が個人に支給する取り組みがある。生理用品の製造・販売を行う企業が、ナプキンを十分に入手できず、生理によって生活に不安を感じている学生を募集し、1年間分の生理用品を無償配布する「奨学ナプキン」の活動を2022年から開始している⁸。25を超える企業・団体からの賛同を得て、これまで19,000件を超える応募のうち総勢6,000人の学生に提供しているという。応募者の約半数の48.9%が、生理用品の購入に「ほぼ毎月苦勞している」と回答し、その理由として78.2%が生理用品の購入で「値段が高

い」と回答している実態も明らかになっている（大王製紙「奨学ナプキン 2025 中間アンケート結果発表」）。

こうした生理用品の無償提供は、公共施設や商業施設では、社会インフラの側面も強く、トイレトーパーと同様の扱いに近づいているといえる。企業や学校の設置は、職場、学習の環境の整備によって、安心して働き学ぶことができ、結果として生産性や学習効果の向上にもつながる。企業にとっては福利厚生 の側面もある。

2-3. スコットランドの国による生理用品無償提供

海外の事例を見てみよう。スコットランドでは、2021 年に「生理用品（無償提供）法（the Period Products（Free Provision）（Scotland）Act2021）」は法律として国王の裁可を経て、2022 年 8 月に施行された。必要とする人に生理用品を提供しなければならないと、世界で初めて法律で義務化されたものである。自治体や教育機関だけでなく、図書館やコミュニティセンターなどで入手することも可能となっている。

スコットランドの「生理用品（無償提供）法」は、生理の貧困の解決だけでなく、尊厳を尊重し、取得可能な生理用品の種類について合理的な選択ができる。専用アプリで提供場所や製品を検索でき、宅配も可能だという。この法案を提案した Monica Lennon スコットランド国会議員は、2016 年から「生理の貧困」の問題に取り組み、法案は 2020 年に議会において全会一致で可決された。

日本において、今すぐ法制化される可能性は高くはないが、国の施策として、「経済財政運営と改革の基本方針 2021（骨太の方針）」や「女性活躍・男女共同参画の重点方針 2021（女性版骨太の方針）」で、生理の貧困は、「女性の健康や尊厳に関わる重要な課題」だと指摘し必要性は認識されている。より広範囲での生理用品の無償提供や、生理用品の課税撤廃などの検討が期待される。

Ⅲ. 大学における生理用品の無償設置

3-1. 大学における生理用品の無償設置の実態

大学における生理用品の備品化・無償提供の取り組みの実態をみてみよう。関西で初めて生理用品を設置した龍谷大学、企業と連携して専用ディスペンサーを開発・販売している大阪大学をはじめ、全国の大学で設置が拡大している。設置数の全国のデータはみられないが、少なくとも 100 校以上の大学で取り組みが進

んでいると考えられる⁹。図表 1 は、関西の大学について生理用品の無償提供の事例をまとめたものである。いずれの大学もコロナ禍以降、大学内で生理用品の備品化や無償提供が開始しており、追手門学院大学のように学生からの発案も少なくない。学生からの発案がダイバーシティ推進の部署との連携、外部企業との連携につながる例もみられる。また、試行期間を経た後に、本格運用につながっている事例も多い。

大学における生理用品の備品化・無償提供は、先述のように提供方法や予算措置は多様である。スマホアプリと連動したディスペンサー「OiTr」を、関西で初めて導入したのは龍谷大学である。次に、大阪大学が開発した「MeW ディスペンサー」を導入している大学も複数ある。さらに、追手門学院大学のように、独自の生理用品ボックスや企業から無償提供されるボックスを利用した事例、企業と連携してナプキン Box とサニタリーボックスをセットで導入することで無償提供をする事例もある。さらに保護者の父母会の支援のもと運用している大学もある。いずれの提供方法も、長所と運用の難しさがあ り、どの方法の持続可能性が高いのか、今後しばらく様子を見る必要がある。

大学における生理用品の無償提供は、「生理の貧困」の解決、女子学生への支援、学ぶ環境の整備としての側面が大きい。一方、教職員や学生の研究テーマとの連携、男子トイレに生理用品やサニタリーボックスを設置する大学も出てきている。

3-2. 埼玉大学では男性トイレにも設置

埼玉大学 Spring Up「すべての人が過ごしやすいトイレプロジェクト」は、学生団体であり、活動の 1 つとして生理用品の無料設置を進めてきた。女性トイレだけではなく、男性トイレにも設置している点が興味深い。2022 年 6 月の活動開始¹⁰から、学内アンケートなどを実施して認知度を高めるなど検討を進め、2023 年 12 月に生理用品の設置が始まった。協力企業と連携して「MeW ディスペンサー」¹¹を導入した。導入にあたり「目標 1 すべてのトイレに生理用品を無料で設置」だけではなく、「目標 2 男性個室トイレにサニタリーボックスを設置」の 2 つの目標をあげた。

埼玉大学 Spring Up（2024）『『すべての人が過ごしやすいトイレプロジェクト』2024 年度報告書』によると、生理用品設置場所は、当初は「女子トイレ」だけであったという。検討を進める中で、前立腺がんや腸疾患を患っている場合におむつや尿漏れパッドを使

図表1 関西の主な大学における生理用品備品化・無償提供の状況について

大学名	活動開始時期	提供方法	活動内容
龍谷大学	2021年9月	OiTr	学生の問題意識と提案から活動を開始。オイテル(株)と龍谷大学の連携協定。関西の大学でOiTrを初導入
大阪大学	2022年3月	Mew ディスペンサー	「MeW プロジェクト」(2021年度から活動開始)が企業とディスペンサーを開発、複数の生理用品(生理用品、タンポン)を提供。その後販売し、自治体、企業、被災地への設置・導入。2025年「大阪・関西万博」会場にも設置
関西大学	2023年3月	Mew ディスペンサー	「関西大学ダイバーシティ推進宣言」(2021年)のもと、学生発のアイデアをきっかけに、生理用品の無償配布を全学的に実施。無償配布の生理用品は更新対象の災害用備蓄品を活用
近畿大学	2023年4月	生理用品ボックス	教員から使用期限が近づいた防災備蓄用の生理用ナプキンを廃棄せず学内トイレへの設置をしてはどうかとの提案があり、学内のトイレの一部で無償提供
立命館大学	2023年9月	Mew ディスペンサー	D&I推進室は、父母教育後援会の支援のもと、学生のウェルビーイング向上を目指し、生理用品の試験的設置実施(2022年9~12月)。2023年9月より、生理用品常時配置を開始
追手門学院大学	2023年10月	生理用品ボックス、 「学校のロリエ」	学生の自主的な活動であるWIL奨励金プロジェクトに採択され、「追大白い羽根プロジェクト」開始。学生による設置・補充。大学補助金(WIL奨励金)から開始し、2年目以降は、学生の団体である「学友会追風」の予算で運営。2025年10月より新校舎に「学校のロリエ」導入
京都産業大学	2024年1月	OiTr	「生理の貧困」をテーマに研究するゼミの学生がダイバーシティ推進室と連携しアンケートなど実施。2022年に必要性を訴えた要望書を提出、大学側が検討し導入が実現
神戸大学	2024年6月	生理用品ボックス	保護者からの寄附により生理用品を購入、設置
兵庫県立大学	2024年7月		2022年、姫路市の防災備蓄から提供を受けた生理用品を学生により学内に設置、その後、学生と兵庫県知事との対話から始まった女性用品配布支援事業に基づく。兵庫県の補助金を交付申請し、7月と3月に女性用品40320個を各キャンパスのトイレに設置
京都大学	2025年11月	ナプキン Box とサニタリーボックス(株式会社トカイ)	施行設置期間(2025年3~5月)を経て、DEIB(ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン&ピロギング)推進の一環として、企業と連携して学内トイレに設置
同志社大学			ダイバーシティ推進の取り組みとして、学生生活で直面する様々な困難を解消するため、以下のトイレに生理用品を無償で設置

(注) 各大学の広報資料、ニュースリリースなどから、筆者作成

空欄は情報が確認できなかった項目。提供方法については、リリースの写真などを参照。

- (資料) 龍谷大学 News (2021年9月21日)「生理用ナプキンの無料化を実現するサービス「OiTr(オイテル)」を導入」
 大阪大学 Mew Project, Press Release (2022年2月28日)「3種類は国立大学初!! 大阪大学全キャンパスでトイレ内で生理用品の無償提供を開始!」
 関西大学プレスリリースNo.77 (2023年3月28日)「各学舎のトイレにおける生理用品の無償配布を開始~ダイバーシティ推進を背景にした学生支援」
 近畿大学 News Release (2023年3月29日)「東大阪キャンパスのトイレで生理用ナプキンの無償提供を開始「生理の貧困」対策や女性のQOL(クオリティオブライフ)向上の取り組み」
 追手門学院大学 WIL REPORT「“追大白い羽根プロジェクト~生理の貧困解決します~”」
 立命館大学新聞社(2022年11月29日)「D&I推進室が生理用品の試験的設置実施 学生のウェルビーイング向上へ」
 立命館大学 NEWS & EVENTS (2023年10月6日)「生理用品の常時設置を開始しました」
 長町理恵子(2025)「生理の貧困への取り組みの課題と展望—学生による「追大白い羽根プロジェクト」の事例から—」
 京都産業大学 DE & I ニュース (2024年1月23日)「生理用ナプキン無料提供サービス「OiTr(オイテル)」の運用開始について」
 神戸新聞 NEXT (2022年12月8日付)「「生理用品はトイレにあって当然の備品、貧困対策じゃない」大学生が無償提供通じて調査、卒業研究に」
 兵庫県立大学ダイバーシティ推進室ニュース(2024年3月28日)「女性用品配布支援について」
 神戸大学お知らせ(2024年6月7日)「女子学生支援のための寄附金により生理用品を購入・設置しました」
 京都大学 News (2025年11月21日)「生理用品設置支援事業を開始しました」

用する男性の利用を想定する必要があること、また生理があるトランス男性（生まれたときに割り当てられた性別は女性だが、性自認が男性）¹²が男子トイレを利用する想定が必要ではないかと議論が深まったという。トランス男性は、使用後の生理ナプキンを持参した袋に入れて持って帰らなくてはいけない実態があるというのだ。少数派ではあるだろう。ただ、報告書では「[トイレ利用者]として想定しやすい対象は、すでに社会階層・健常者・男女二元論（宗教や人種）などによって規定（制限）されている」点について、マジョリティの利益を優先し、マイノリティを「排除」していることがありえると指摘し、「排除の論理が再生産され続けることを避ける」ことが必要だと指摘する。

導入にあたり実施したアンケートの結果では、トイレ別にみた導入の賛成率は、女性トイレへの導入は約93%、みんなのトイレは約65%と賛成派が多い。男性トイレへの導入の賛成率は21.4%だが、予想よりも高かったという。自由回答からは、性的マイノリティ当事者から必要性を訴える声もあった。埼玉大学では、トランス男性の存在を強調したいのではなく、「生理があっても見えない存在とされてきた男性がいる現状を認識してもらえるようにする」ことが、男性トイレへの設置の目的だとしている。

以上から、生理用品の設置は、生理を語ることのタブー、男性と生理の関わり方、LGBTQの人たちへの対応・理解など、これまで恥ずかしい、人前で話してはいけないといった固定観念のもとに無意識、無自覚であった社会課題を顕在化させ、再考する機会だといえる。

IV. 追手門学院大学の事例から

4-1. 「追大白い羽根プロジェクト」の継続と拡大

追手門学院大学では、2023年10月から大学のトイレ内にボックスを設置し、生理用品を無償提供している。「追大白い羽根プロジェクト」は、2023年に学生が立ち上げ、学生企画が大学のWIL奨励金プロジェクトに採択され、大学補助金で生理用品ボックスと生理用品を購入・設置し、プロジェクトが始動した¹³。2024年度以降は、追手門学院大学の成熟社会研究所¹⁴に所属し、アンケートによる継続希望もあり、学友会追風¹⁵の支援で運用されている。長町（2025）は課題として、プロジェクトの継続および予算確保を指摘していた。この点について、学生の取り組み実績

が蓄積され、学内での認知度の高まりなどから活動を継続し、2025年度は活動の規模を拡大した。

追手門学院大学は、2025年4月に総持寺キャンパスで第2期棟となる新校舎「アカデミックベース」の運用を開始した。総持寺キャンパスは2019年に新キャンパスとして運用を開始しており、第1期棟「アカデミックアーク」では、すでに生理用品ボックスを導入、生理用品を無償提供している。2025年4月、メインキャンパスが安威キャンパスから総持寺キャンパスに移転し、複数の学部、多くの学生が安威から総持寺へ移転・移動した。これに伴い、新校舎への生理用品の設置が新たな課題となった。

「追大白い羽根プロジェクト」の代表学生¹⁶は、メインキャンパスの移転前から大学側と新校舎への設置について調整し、企業との連携に向けて複数企業との打ち合わせに同席し、視察で来学した企業担当者に校内を案内した。新校舎には、障がい者用の機能を備えた多目的トイレの他に、新しい試みとして性別に関係なく誰でも利用できる「オールジェンダートイレ」¹⁷が導入され、最新のトイレ事情に、企業担当者も驚いていた。

大学への提案、学内での検討が進んだ結果、新校舎には花王株式会社「学校のロリエ」の導入・設置が決まった（図表2）。設置場所も検討し、2025年10月から新校舎「アカデミックベース」にも生理用品の無償提供が実現した。花王が推進する「ナプキンの備品化プロジェクト」と連携した活動で、企業から無償提供されたボックスを活用する。これまでのボックスと合わせて、追手門学院大学では2種類のボックスで生理用品の無償提供を継続することとなった。オールジェ

図表2 「追大白い羽根プロジェクト」ボックス



新校舎に導入した「学校のロリエ」

（注）花王株式会社様の「学校のロリエ」と連携し、生理用品を無償配置。追手門学院大学 総持寺キャンパス新校舎「アカデミックベース」に設置されたもの。

ンダートイレにも「学校のロリエ」を設置した。オールジェンダートイレは、大学にとっても初めての試みであり、今後の運用については随時点検、検討していくこととなっている。学生の自主的な活動に対する大学からの支援が拡大し、活動を継続している追手門学院大学の取り組みは新しいステージへ移ったといえる。

4.2. 生理用品の備品化の新たな意義と考察

複数の大学（企業）で導入が進む「学校（職場）のロリエ」について、花王の公式サイトでは、設置場所や運用について、様々な学校や企業の事例が紹介されており気づきが多い¹⁸。例えば、男子生徒も含めた生徒会メンバー全員で話し合いながら導入を進めた高校。衛生管理が厳しく工場には私物を持ち込めないが、工場のトイレに生理用品が設置されたことで、自分のロッカーに戻らなくてもよくなり、働く女性の安心につながっている事例。また、生理への理解が進み、生理中の従業員に「体調面の気遣い」をみせる機会が増えたという効果もみられる。

導入後の運用については、学校や企業に任されており、トイレ内の補充を清掃員やメンテナンス会社に委託する事例もある。障がい者の就労を促進する特例子会社が担当する事例など、組織によっても運用は異なる。ボックスの運用や活用方法の自由度が高いことは、導入のハードルを下げることにつながる。

導入実績からみられるのは、生理用品の備品化というプロジェクトを通して、備品化にとどまらず、導入する企業や学校の運用・方針によって新たな意義が付与されていることであり、この点が興味深い。同じ「学校（職場）のロリエ」であっても、備品化プラスアルファの意義や効果は、導入する学校や企業によって異なる。個人的な課題だった生理を組織全体で考えること、組織の力につなげていくことなど、新たな問題提起の機会となっていることも多いと考えられる。

「追大白い羽根プロジェクト」の新たな意義について考察してみたい。生理用品の無償設置の活動を学生が立ち上げ、現在も学生が運用している「追大白い羽根プロジェクト」では、週1、2回の頻度で、シフトを組んで学生が補充活動をしている。その他、授業と連携した講演会の開催、学外へのプレゼン・報告など活動の範囲は広がっている。他大学との合同ゼミでプレゼン報告した内容をみると¹⁹、学生自身が考える「学生が取り組む意義」として3つをあげている。それは、(1) 大学は自ら動き、変えていく場

所、(2) 「立ち上げた責任」を力に変える、(3) 学生の行動が大学を動かす、の3つである。(1) については、「私たちは「支援を受ける側」ではなく、社会を「変える主体」でありたい」と訴えている。(2) については、社会課題を解決したいという初期の強い思いから、日々の地道な補充活動を、責任を持って継続できる、という覚悟でもある。(3) については、「学生が自ら動くからこそ、大学側もそれに応え、本気のサポートをしてくれる。この相乗効果がプロジェクトの核」だと報告している。活動に参加する学生自身が、自分たちで行動することが、社会課題の解決につながっていることを実感している。それこそがプラスアルファの意義であろう。同時に、大学や他の学生たちに、プロジェクトについて周知し、働きかけている。

「追大白い羽根プロジェクト」の活動について、2025年11月、市民団体から学生にヒアリングをしたと大学に問い合わせがあった。大学が所在する市内の小中学校に生理用品の無償提供を推進したいという市民団体に赴き、学生が説明し意見交換をした²⁰。学生の活動をお話すると同時に、市内の小中学校の現状や、小中高校に生理用品の無償設置をしている他都市の取り組みなどについて何う機会となった。こうした活動の積み重ねが学生の学びや成長につながっているだけではなく、少しずつ学外での認知にもつながっていると感じる。これもまた新しい意義であろう。

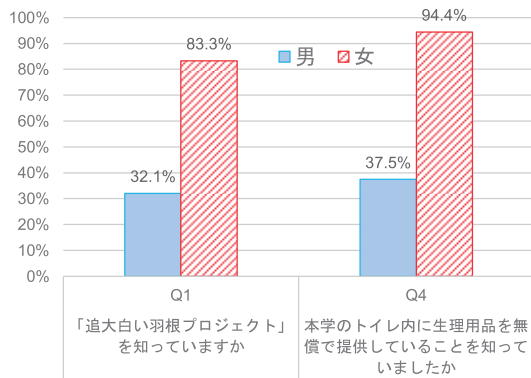
4.3. 「生理」に関する講演会と学生の意識

学内での男子学生への認知はどうだろうか。「追大白い羽根プロジェクト」は、生理用品の無償設置の活動を通じて、学びの環境の向上に貢献しており、女子学生や教職員の認知度は高まっている。一方、「追大白い羽根プロジェクト」メンバーには、数人の男子学生も参加しているものの、多くの男子学生の認知は低いものと考えられる。

2026年1月7日、「追大白い羽根プロジェクト」は、追手門学院大学経済学部の講義「男女共同参画社会論」と連携し、「生理の課題と「男性」はどうつながるの？」と題して講演会を開催した。「男女共同参画社会論」は、筆者が担当する経済学部の講義で、経済学部多様社会コースの学生を中心に2～4年生が受講している。様々な場面における男女共同参画について経済の視点から学ぶ講義となっている。追手門学院大学経済学部の男女比は、女子学生が2割にとどまり、8割が男子学生という構成となっている。

講演は、先述した埼玉大学 Spring Up で活動してい

図表3 「追大白い羽根プロジェクト」の認知度



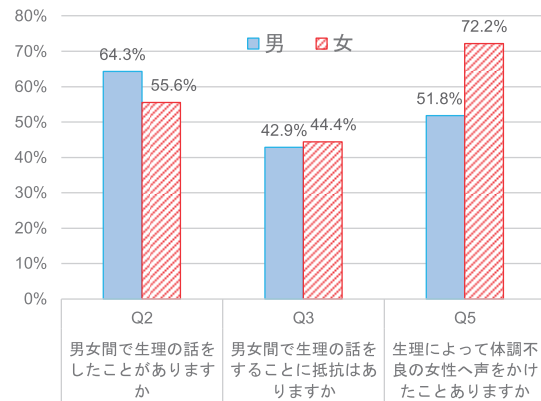
(注) 講演 (2026年1月7日) に参加した追手門学院大学の男女学生 (74人) のうち「はい」と回答した割合

た経験をもつ外部講師²¹を招き「生理の課題と「男性」はどうつながるの?」をテーマに、ご本人の経験や事例に基づいてお話いただいた。「生理」というテーマに対する男子学生の反響は大きく興味深い。

講演に参加した追手門学院大学の学生は、男女合わせて100名を超えていた。そのうち74名が、講演会場で提示したQRコードからアンケートに回答した。「本学のトイレ内に生理用品を無償で提供していることを知っていましたか」と質問したところ、女子学生は94.4%、男子学生は37.5%と認知度に大きな差があった(図表3)。次に、「追大白い羽根プロジェクトを知っていますか」という質問になると、それぞれ83.3%と32.1%と認知度が若干下がり、具体的なプロジェクト名称までは知らない学生も一定数存在することがわかった。この結果から確認できるのは、プロジェクトの学生が懸念していたように、男子学生への認知度が低いことである。男子学生への周知の目的もあり、講演会の冒頭、「追大白い羽根プロジェクト」の学生が活動内容について報告した。

次に、学生の「生理」への向き合い方について、「男女間で生理の話をしたことがありますか」の質問に対して、男子は64.3%、女子は55.6%と、男子学生の方が「はい」と回答した割合が高い(図表4)。一方、「男女間で生理の話をするに抵抗はありますか」の質問に対しては、男女とも約4割が「はい」と回答しており男女差はほとんどない。この結果をみた外部講師からは、結構多いという印象だとコメントを得た。筆者も同感である。ちなみに、大王製紙(2020)が16歳~65歳の男女を対象にした調査では、「生理について異性と話すことに抵抗があるか」という質問に対し、10代の58.7%、20代の49.6%が、抵

図表4 「生理」への向き合い方



(注) 講演 (2026年1月7日) に参加した追手門学院大学の男女学生 (74人) のうち「はい」と回答した割合

抗が「非常にある(またはややある)」と回答しており、追手門学院大学の結果よりは若干高い。ただ、10-20代の若年層男性は生理への理解意欲が高いという結果も示されていること、現在は、調査した2020年より「生理の貧困」などへの注目度が高まっていると考えられる。

図表4の2つの質問(Q2, Q3)をクロス集計すると、実際に「男女間で生理の話をするに抵抗はありますか」に「はい」と回答した者で、「生理の話をしたことがある」のは男女とも約3割にとどまる。一方「抵抗がない」と回答した男女の約6割が「生理の話をしたことがある」と回答しており、男女差は見られないものの心理的な抵抗の影響は大きいといえる。

「生理によって体調不良の女性へ声をかけたことありますか」という質問については、男子が51.8%、女子が72.2%であり、女性同士は生理による体調不良について、声をかけやすい状況がわかる(図表4)。簡易的なアンケートではあるが、男性の生理への意識が垣間みえる結果であった。

講演後、学生が印象に残ったことを回答してもらった。「生理用品の無料設置」を単なる支援や配慮としてではなく、「ジェンダーを分類する社会的規範そのものを問い直す実践」として捉えていた点、あるいは、生理は「特別なこと」でも「恥ずかしいこと」でもなく、誰にでも起こりうる自然な体の仕組みだと繰り返し説明されていた点をあげるコメントなど多数の感想が寄せられた。学内のプロジェクトの認知度は高める余地があるが、生理に対しこれまで無意識だった男子学生が自分たちの課題であると意識が変化する、または生理への無意識が顕在化した学生が一定数いたことが講演会の成果でもあろう。

V. おわりに

本稿では、「生理の貧困」などを背景に、生理用品の備品化・無償提供について、企業や大学における取り組みの現状、活動に伴う追加的な新たな意義や本質的な課題について整理し、追手門学院大学「追大白い羽根プロジェクト」の事例から考察した。

現状について明らかになったのは、第一に、企業においては生理休暇の取得しづらさがある一方で、健康経営やウェルビーイングの視点で、生理用品の備品化に取り組む企業が増えていることだ。第二に、コロナ後、大学における生理用品の無償設置が増加していることだ。取り組みのきっかけが学生の発案による事例も多く、試行期間を設けて大学として常時設置に移行する事例が多いことである。第三に、生理用品の備品化・無償設置は、職場や学校の環境整備だけでなく、組織にとって新たな意義やプラスの効果をもたらす。すなわち、生理をタブー視しない、女性だけの課題にせず男女一緒に考える、そして男女、性的マイノリティなどの相互理解につながることだ。第四に、学生主体で活動する「追大白い羽根プロジェクト」では、学生が当事者となって、大学に働きかけ学びの環境を変えていくという新たな意義を学生自身が見出していることである。

今後の課題として、「生理」「生理の貧困」への偏見や理解不足を改善すること、生理用品設置の費用や補充コストの経済的負担を軽減すること、大学などにおいて「一過性」ではなく持続可能な取り組みとなるような継続性の確保があげられる。

注

¹ 任意団体「#みんなの生理」が、高校生以上の学生を対象に実施したオンラインアンケートの中間報告（2021年3月4日に公表）。生理用品が入手困難な理由として、コロナ禍で収入が減ったこと、外出自粛や店舗の時短営業など、就業や生活が厳しい女性たちの存在が顕在化した。また、厚生労働省（2022）「『生理の貧困』が女性の心身の健康等に及ぼす影響に関する調査」でも、2020年2月頃以降、生理用品の購入・入手に苦労している人は、18・19歳で12.9%、20代で12.7%、30代で8.6%と若年層で苦労している割合が高いことがわかる。

² ウェルビーイング（Well-being）は、「個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあることを意味する概念」である（厚生労働省）。WHO（世界保健機関）憲章の中で「ウェルビーイング」という言葉が使用されている。

³ 経済産業省（2022）「健康経営の推進について」で「健康経営銘柄2022選定及び健康経営優良法人2022（大規模法人部門）認定要件」および「健康経営優良法人2022（中小規模法人部門）認定要件」として「女性の健康保持・増進に向けた取り組み」が評価項目の1つとなっている。

⁴ 労働基準法第120条では、第68条の規定に違反した者には、「三十万円以下の罰金に処する」と定められている。

⁵ フェムテック（Femtech）とは、女性（Female）と技術（Technology）を組み合わせた造語。デンマーク出身の起業家アイダ・ティン（Ida Tin）がつくったといわれ、生理や妊娠など女性の悩みを解決し、女性の健康を支える商品やサービスを指す。フェムテックは、2015年に国連で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）のうち、3「すべての人に健康と福祉を」、5「ジェンダー平等を実現しよう」にも直結している。

⁶ オイテル株式会社と株式会社ネクイノの2社の合計。2021年からOiTrを設置しサービスを提供開始したオイテルは、352カ所、3,771台。ネクイノのトレルナのサービスは、148カ所。いずれも2026年2月時点（2026年2月17日閲覧）。

⁷ 生理用品を製造販売する花王株式会社は、2022年から日本初の「ナプキンの備品化プロジェクト」として、「職場のロリエ」、「学校のロリエ」のプロジェクトを実施している。2025年以降、他の同業の企業でも無償ボックスやディスペンサーの提供を開始している。

⁸ 大王製紙株式会社が実施している。

⁹ 大学での生理用品無償提供は、サービスを提供する企業や大学の公式サイトなどから100校を超えると考えられる。

¹⁰ 「Spring Up」は、2023年3月までは任意団体「Voice Up Japan 埼玉大学支部」で活動。2023年4月以降、Voice Up Japanを離れ、Spring Upとして活動。

¹¹ 大阪大学「Mewプロジェクト」は、生理用品の無償提供用のディスペンサーの開発・設置の実証実験を実施している。「Mewプロジェクト」が企業と連携して開発したのが「Mew ディスペンサー」であり、他大学、自治体、被災地、大阪・関西万博などで導入・設置されている。

¹² LGBTQは性的マイノリティとも言われる。「性自認（Gender Identity）」は、自分の性をどのように認識しているのか、どのようなアイデンティティ（自己同一性）を自分の感覚として持っているのかを示す概念である。「性的指向（Sexual Orientation）」は、人の恋愛・性愛がどのような対象に向かうのかを示す概念である。異性愛、同性愛、両性愛があり下記がある。

- ・レズビアン（Lesbian）：女性の同性愛者
- ・ゲイ（Gay）：男性の同性愛者
- ・バイセクシュアル（Bisexual）：性自認は男性または女性で、恋愛対象は女性と男性の両方（両性愛者）
また、下記のように、多様な性的指向・性自認を持つ人々が存在する。
- ・トランスジェンダー（Transgender）：身体的な性が男

- 性であっても性自認が女性というように、身体的な性と性自認が一致しない人
- ・クエスチョニング (Questioning) : 性的指向や性自認が揺れ動いたり、いずれかに決められない、決めたくない、わからない等の感覚の人
- 上記の英語の頭文字をとった LGBTQ が、性的指向や性自認などに関して、少数者と位置付けられている人々を総称する語として使用される (文部科学省「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について (教職員向け)」を参照)。
- ¹³ 「追大白い羽根プロジェクト」の活動の詳細は、長町 (2025) を参照。
- ¹⁴ 追手門学院大学成熟社会研究所は、「鳥瞰的・横断的視点を持って伝統と革新の中から物事の本質をとらえ、若者の自立と社会環境に関わる調査・研究・提言」をめざしている。
- ¹⁵ 学友会追風は、追手門学院大学の全学生が会員となり、学生が中心となって主体的に運営し、教職員がサポートする組織である。
- ¹⁶ プロジェクト立ち上げ時の代表、副代表は卒業しており、現在は2代目の代表 (森川結衣)、副代表 (安田実侑) が引き継いでいる。他のメンバーも入れ替わっている。
- ¹⁷ 第2期棟「アカデミックベース」のオールジェンダートイレは、個室トイレ (一部、男性専用) が複数集積し、通路も複数ある設計となっており、性別を問わず利用できる。入り口にある電光掲示板で、使用中の個室の場所がわかるよう工夫されている。
- ¹⁸ 花王の取り組みは、企業が導入する場合は「職場のロリエ」と呼び、学校の場合は「学校のロリエ」と呼んでいる。
- ¹⁹ 2026年1月19日、金沢大学を訪問し、金沢大学と合同ゼミを実施し、「追大白い羽根プロジェクト」についてプレゼン発表した。
- ²⁰ 市民団体は、2024年に茨木市「ローズ WAM まつり」に参加した「追大白い羽根プロジェクト」の学生のオープニングリリーススピーチを聞いたという。
- ²¹ 講師には、埼玉大学 Spring Up の活動の代表を務め、男性トイレにも生理用品設置を推進し、現在、大阪大学大学院人間科学研究科教育文化学研究室博士後期課程の谷本成星氏をお招きした。
- 3回 京大生理用品の試行設置へ学生の活動も」<https://www.kyoto-up.org/archives/10724> (2026年2月18日閲覧)
- 経済産業省 (2022) 「健康経営の推進について」https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/healthcare/downloadfiles/kenkokeiei_gaiyo.pdf (2026年2月16日閲覧)
- 経済産業省 (2024) 「女性特有の健康課題による経済損失の試算と健康経営の必要性について」https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/healthcare/downloadfiles/jyosei_keizaisonshtsu.pdf (2026年2月16日閲覧)
- 経済産業省 (2025) 「これからの健康経営について」https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/healthcare/downloadfiles/250424_kenkoukeicigaiyou.pdf (2026年2月16日閲覧)
- 厚生労働省 (2022) 「『生理の貧困』が女性の心身の健康等に及ぼす影響に関する調査」https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_24693.html (2026年6月26日閲覧)
- 埼玉大学 Spring Up (2024) 「『すべての人が過ごしやすイトイレプロジェクト』2024年度報告書」https://note.com/springup_saitama/n/nf81f1c3786f (2026年2月1日閲覧)
- 大王製紙 (2020) 「『令和』の生理に対する意識の実態とは」https://www.daio-paper.co.jp/wp-content/uploads/20200127_1.pdf (2026年2月18日閲覧)
- 大王製紙 (2025) 「奨学ナプキン 2025 中間アンケート結果発表」<https://www.elleair.jp/elis/meetmyelis-shogaku/questionnaire07/> (2026年2月18日閲覧)
- 長町理恵子 (2025) 「生理の貧困への取り組みの課題と展望—学生による『追大白い羽根プロジェクト』の事例から—」『追手門学院大学成熟社会研究所紀要』第9号
- 矢野経済研究所 (2025) 「フェムケア&フェムテック (消費財・サービス) 市場に関する調査を実施 (2025年)」プレスリリースNo.3950 (2025年11月27日公表) (2026年2月20日閲覧)
- 山本勲, 福田皓, 永田智久, 黒田祥子 (2021) 「健康経営銘柄と健康経営施策の効果分析」RIETI Discussion Paper Series 21-J-037

参考文献

- 足立清人 (2022) 「生理用品 (無料提供) (スコットランド) 法 2021年」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』第59号
- 遠藤明子 (2023) 「福島大学における生理用ナプキン無償提供プログラム「OiTr (オイテル)」の導入」『福島大学地域創造』第35巻第1号
- オイテル (OiTr) <https://www.oitr.jp/> (2026年2月16日閲覧)
- 花王公式「職場のロリエ」「学校のロリエ」<https://www.kao.co.jp/laurier/project/shokuba/> (2026年2月16日閲覧)
- 京都大学新聞 (2025年4月1日) 「【特集】大学生と月経 第

身体感覚を取り戻す学び

—背骨意識からひらくアクティブ・ラーニング—

今 堀 洋 子

1. はじめに

筆者はこれまで、身体性を伴う学びの可能性について関心を持ち、とりわけ身体を通した体験が学習者の内面にどのように作用するのかを探究してきた。近年の教育環境では、知識理解が重視される一方で、自らの身体感覚に意識を向ける機会が必ずしも多いとは言えない。そのような状況の中で、身体感覚を取り戻すことが学びの質にどのような意味を持つのかという問題意識を持つに至った。

その探究の過程において、筆者は SACHI TAKEKOSHI 氏 (Happy ちゃん) が創出した身体表現メソッドに着目してきた。2023 年度および 2024 年度の研究ノートでは、同氏が展開する実践が、学習者の感情や自己認識に働きかけ、主体的な学びを促す契機となりうる点に注目し、アクティブ・ラーニングとの接続可能性について検討を行ってきた。ここでは、身体を通した体験が、言語的理解を超えて学習者の内面に作用しうることを、筆者自身も実践の中で実感してきた^{i, ii}。

この1年においても、SACHI TAKEKOSHI 氏は新たなメソッドを生み出し続け、著書『存在革命』ⁱⁱⁱを出版した。そうした動きを参与観察する中で、筆者は、同氏が提唱する背骨を中心とした身体意識や中心軸への感覚が、身体感覚を取り戻す契機となりうるのではないかと考えるようになった。

本研究ノートでは、これまでの研究を踏まえつつ、SACHI TAKEKOSHI 氏が提唱する身体感覚へのアプローチ、とりわけ背骨意識に着目し、「身体感覚を取り戻す学び」という視点から、アクティブ・ラーニングのあり方を問い直すことを目的とする。

2. 身体性と学びに関する理論的背景

近年、教育学や学習科学の領域において、「身体性

(embodiment)」への関心が高まっている。従来の学習観では、学びは主として認知的な情報処理として捉えられてきたが、近年では、学習が身体的経験や感覚と切り離せない営みであることが指摘されている。すなわち、人は身体を通して世界と関わり、意味づけを行いながら学んでいる存在であるという理解である。

このような視点は、経験を通した学びを重視する教育思想にも通じる。デューイ (Dewey, 2004) は、教育とは経験の再構成の過程であり、学習は経験を通して深化すると述べている^{iv}。身体を伴う経験は、学びの基盤として重要な意味を持つと考えられる。

また、学びが環境や他者との相互作用の中で形成されるという視点は、状況的学習論においても示されている (レイヴ&ウエンガー, 1993)。そこでは、学習とは共同体への参加の過程であり、学習者は身体を伴う実践を通して学びに関与していくとされる^v。この理解に立てば、身体的な関与や感覚的な経験は、学びの質に影響を及ぼす要因として位置づけられる。

さらに、ポランニー (2003) が提唱した「暗黙知 (tacit knowledge)」の概念^{vi}は、身体性と学びの関係を理解する上で示唆的である。暗黙知とは、言語化や形式化が困難でありながら、人が行為や経験を通して身につけている知のあり方を指す。この視点に立てば、学びとは明示的知識の獲得だけでなく、身体を通して培われる感覚や気づきの積み重ねでもあると言える。

また、教育実践の文脈では、情動や感覚が学習に与える影響についても関心が寄せられている。学習者が安心や集中状態を感じているとき、学びへの関与が深まることは、多くの教育現場で共有される実感であろう。このように、学びは認知・身体・情動が相互に関わり合う全人的なプロセスとして捉える必要がある。

本研究ノートでは、こうした身体性に関する議論を踏まえつつも、理論的検討に主眼を置くのではなく、「身体感覚に着目することが、学びのあり方をどのように問い直しうるのか」という観点から考察を進めて

いく。

3. SACHI TAKEKOSHI 氏の実践の展開と背骨意識への到達

3-1. 初期段階における実践の特徴 (MOMED 事例)

初期段階の実践を象徴するものとして、2023年度に筆者の授業において実施された MOMED (SorANJI) の実践が挙げられる^{vi}。この実践では、歌とダンスを通して自身の感情や内面に目を向けることが促された。

受講生からは、「心が開けたように感じた」「自分の感情を大切にしたいと思った」「自分を表現し受け入れる感覚を得た」といった声が寄せられた。また、「一体感を感じた」「解放感を得た」という記述も見られ、身体を動かすことが感情の解放や自己受容につながる可能性が示唆された。

これらの反応は、外的な技能習得よりも、身体を通じた体験が内面的な気づきをもたらす点に同氏の実践の特徴があることを示している。

3-2. 存在への関心の深まり

MOMED に代表される初期の実践では、感情や自己表現に焦点が当てられていたが、2025年以降の同氏の発信には、「存在」そのものへの関心がより明確に見られるようになっていく。

2025年の同氏の発信を参与観察する中で、筆者は、発信内容の方向性に変化が見られることに気づいた。従来は自己表現や行動を促す語りが中心であったのに対し、「自分がどのような状態で在るか」や「内側の感覚に気づくこと」を重視する語りが増えていったように見受けられる。

その過程において印象的であったのが、2025年1月にエベレスト・ベースキャンプまで歩いた経験を語る際に、「呼吸を頼りに進んだ」と述べていた点である^{vii}。ここでは、思考や気合ではなく、身体感覚に意識を向ける姿勢が強調されていた。

また、2026年に出版された著書『存在革命』^{ix}は、こうした関心の展開を象徴する出来事と捉えられる。同書に至る過程において、「存在」という語が発信の中で重要な位置を占めるようになっていったと考えられる。

これらの変化は、思想的転換というよりも、身体感覚への注意を深めていく過程の一部と理解できる。存在を感じるとは、思考よりも先に、自身の身体の状態

や感覚に気づくことを含んでいると考えられるからである。

3-3. 身体感覚への焦点化

「存在」への関心が深まる過程において、同氏の発信には、身体感覚そのものへの言及が増えていった点も特徴的である。語りの中で、思考や解釈よりも、「今、身体がどう感じているか」に意識を向けることが繰り返示されるようになっていった。

参与観察を通して見られた実践においても、呼吸や身体の状態に注意を向けることが促され、「外側を変える前に、まず自分の状態に気づくこと」が重視されていた。ここでは、身体感覚は単なる身体反応ではなく、自身の在り方を知る手がかりとして位置づけられているように見受けられる。

同氏は、自身の身体感覚への気づきを深める経験として、海外での特定の儀式的体験について語ることもある。そうした体験の中で、「呼吸によって意識を保つこと」や「身体の感覚を細やかに味わうこと」の重要性が強調されている点は印象的であった。

これらの語りからは、同氏が身体感覚を、自身の状態や存在を理解するための重要な手がかりとして捉えていることがうかがえる。このような身体への注意の向け方は、自己理解や気づきの契機となる可能性を示唆している。

3-4. 背骨意識への到達

身体感覚への関心が高まる中で、2025年12月頃から、同氏の発信や表現活動に「背骨」という語が用いられるようになった点は注目される。特に、同年12月に行われた演劇表現の中で、背骨を身体を中心軸として捉える語りが見られたことは象徴的であった。

同氏は、私たちが通常、「脳で考え、その後には身体で受け止める」という順序で世界を理解しがちであるのに対し、「まず背骨(脊髄)で受け取り、その感覚が脳へと伝わる」という身体感覚主導の在り方を提案している。これは、「身体の深いレベルで世界を受け取り、それをもとに脳がまとめる」という身体観に基づく語りとして示されていた。

筆者の参与観察においても、この頃から、同氏の実践に触れた人々に行動面での変化が見られるようになった。具体的には、他者との比較を基準とする生き方から、自身の内側の感覚に注意を向ける姿勢へと日常の選択や行動が変化していく様子がうかがえた。

4. 『存在革命』にみる存在感覚の思想

前章までに見てきたように、同氏の実践は、自己表現や感情解放の段階から、身体感覚や存在そのものへの関心へと展開してきた。本章では、2026年に出版された著書『存在革命』を手がかりに、同氏が提示している存在感覚に関する思想的特徴を整理してみたい³。

筆者自身、これまでの参与観察を通して、同氏の語りの中に一貫して「在り方」への問いが含まれていることを感じてきた。『存在革命』においては、その関心がより明確に言語化されているように見受けられる。

同書で特徴的なのは、人が「何をするか (Doing)」よりも、「どのような状態で在るか (Being)」を重視する姿勢である。そこでは、成果や行動を積み上げることよりも、自身の内側の状態や身体感覚に気づくことが重要視されている。

4.1. Doing から Being への関心の移行

『存在革命』において繰り返し語られているのは、人が「何を達成するか」よりも、「どのような状態で在るか」に目を向けることの重要性である。

一般に現代社会では、成果を出すことや目標を達成することが重視されやすい。学習や仕事においても、「何をできるようになったか」「どれだけ成果を上げたか」が評価基準となることが多い。このような志向は、本稿では便宜的に Doing 志向と呼ぶことができる。

これに対し、同氏の語りに見られるのは、自身がどのような状態で在るか、どのような感覚を持っているかに注意を向ける姿勢である。そこでは、行動や成果に先立って、自身の内側の状態を整えることが重視されている。このような在り方は、Being 志向と捉えることができるだろう。

これは Doing を否定するものではなく、行動や成果を支える基盤としての「状態」に目を向ける視点の提示と理解できる。筆者はここに、身体感覚を手がかりに自身の在り方を問い直す試みを見ることができると考えている。

4.2. 外的評価から内的感覚への視点の移行

『存在革命』においては、人が行動を選択する際の基準にも言及が見られる。そこでは、他者からの評価や社会的基準ではなく、自身の内側の感覚を手がかり

にする姿勢が語られている。

一般に私たちは、他者からどのように見られるか、社会的にどのような評価を得られるかを基準に行動を選択することが多い。このような基準は、社会生活を営む上で重要な役割を持つ一方で、自身の感覚を後回しにする傾向を生み出すこともある。

これに対し、同氏の語りでは、「自分の身体がどう感じているか」を判断の手がかりとする姿勢が示されている。そこでは、違和感や心地よさといった身体感覚が、自身の在り方を知る指標として位置づけられているように見受けられる。

これは外的評価を否定するものではなく、判断基準の一部を身体感覚へと広げる視点の提示と理解できる。筆者はここに、身体感覚を通して自己理解を深める試みを見ることができると考えている。

4.3. 身体中心性という視点

『存在革命』に通底しているのは、身体を通して世界を受け取るという視点である。そこでは、思考や判断よりも先に、身体が感じている状態に注意を向けることが重視されているように見受けられる。

特に背骨や中心軸への言及は、身体の構造を説明するというよりも、自身の状態に気づくための手がかりとして語られている点が特徴的である。背骨という身体の中心に意識を向けることは、自身の感覚を確かめ、今ここに意識を戻すための一つの比喩的表現として理解することができるだろう。

筆者はここに、人が身体を通して自身の在り方を問い直す視点を見ることができると考えている。このような身体中心性の視点は、学びを考える上でも示唆的である。

5. 修験道における身体感覚の実践との接点

以上のように整理してきた存在感覚や身体中心性の視点は、現代において新たに提示されたものとして受け止められがちである。しかし、身体を通して自己や世界を理解しようとする試みは、日本の伝統的実践の中にも見ることができると考えている。

とりわけ修験道における山岳修行は、自然環境の中で身体を通して気づきを得る実践として長く継承されてきた。本章では、この修験道の身体観に着目し、身体感覚を基点とする学びとの示唆的な接点について検討してみたい。

5-1. 修験道における身体感覚の実践

修験道は、日本独自の信仰形態として、古来より山岳修行を中心に展開してきた実践宗教である。自然信仰を基底としつつ、仏教や道教思想と習合する中で形成され、人々の精神文化の中に深く刻まれてきたとされる。

日本の山岳信仰を基盤として発展してきた修験道は、古くから山中での修行を通じて自己を鍛錬する伝統を持つ。その特徴は、教義理解よりも身体を通じた体験を重視する点にある。修行者は山を歩き、滝に打たれ、自然環境の中で長時間を過ごすことで、自らの身体と向き合うことを求められる。

山中という非日常環境に身を置くことで、修行者は日常生活では意識されにくい呼吸や疲労感、足裏の感覚、姿勢の変化などに自然と注意を向けることになる。こうした実践は、単なる身体訓練ではなく、身体感覚を通じて自己や環境との関係に気づくプロセスとして位置づけられてきた。

とりわけ山中での登拝行や山伏修行では、自らの足で一歩一歩進む歩行そのものが修行となる。また、宿坊を拠点とし、先達に導かれながら修行が行われてきた歴史があり、現代においても山伏修行は継続され、多くの参加者が身体を通じた体験を求めて参加していることが報告されている^{xi}。

こうした修行の構造は、知識の獲得というよりも、身体を通して環境や自然と関わる中で気づきを得ることに重きを置く点に特徴がある。修験道における学びは、言葉による理解ではなく、身体的経験を通じて徐々に体得される性質を持つといえるだろう。

筆者は、ここに身体感覚を基点とした気づきのプロセスを見ることができると考えている。身体を通して自己や世界を理解しようとする試みは、現代に新たに現れたものではなく、日本の伝統的実践の中にも確かに存在してきたのである。

5-2. 歩行・呼吸・姿勢・祈りという身体技法

修験道の修行においては、特別な技法を学ぶというよりも、歩くこと、呼吸すること、姿勢を保つこと、祈ることといった、日常的な身体動作がそのまま修行となる点に特徴がある。

とりわけ登拝行においては、自らの足で山道を進む中で、足裏の感覚や身体の重さ、疲労の度合いに自然と意識が向けられる。修行者は、速さよりも一定のリズムで歩き続けることを求められ、その過程で身体の状態に注意を向けることになる。

また、山中での修行では、呼吸が重要な役割を持つ。標高差や気温の変化の中で歩き続けることで、呼吸の浅さや乱れに気づき、自然と深い呼吸へと整えられていく経験が生じる。

姿勢についても同様である。山道を歩く際には、身体の傾きや重心の位置が歩きやすさに直結するため、無意識のうちに姿勢が調整される。この過程で、身体を中心に意識する感覚が育まれていく。

さらに、修験道の修行においては、祈りや勤行も重要な実践である。祝詞や真言を唱え続ける行為は、単なる信仰表現にとどまらず、一定の呼吸リズムと身体感覚を伴う実践となっている。声を出し続ける中で、呼吸の深さや腹部の動きに自然と意識が向けられ、身体全体の感覚が調律されていく経験が生じる。

祈りは、思考による理解というよりも、身体を通して整えられていくプロセスを含んでおり、身体感覚に基づく気づきを促す契機となっている側面があると考えられる。

これらの実践は、特別な指導によって教えられるというよりも、身体を環境に委ねる中で自然と体得される側面を持つ。筆者はここに、身体感覚を通じた気づきのプロセスを見ることができると考えている。

5-3. 身体で気づくという学びの構造

これまで見てきた修験道の実践は、知識や理論を学ぶことよりも、身体を通じた経験を通じて気づきを得ることに重きが置かれている点に特徴がある。修行者は、歩行、呼吸、姿勢、祈りといった身体的行為を繰り返す中で、自らの状態や環境との関係に気づいていく。

こうした構造は、近年提唱されている身体感覚に基づく実践にも示唆的な視点を与えるものである。そこでは、思考による理解に先立ち、身体の状態や感覚への気づきが重視されている点が共通している。

身体に注意を向けることは、自身の状態を知る手がかりとなり、その気づきが次の行動や判断に影響を与える。このように、身体感覚を起点として気づきが生じるプロセスは、一つの学びの構造として捉えることができるだろう。

筆者はここに、身体を基点とする学びのあり方を再考するための示唆を見ることができると考えている。

6. 存在感覚に基づくアクティブ・ラーニングの可能性

第5章では、修験道の実践を手がかりに、身体感覚を基点として気づきが生じる学びの構造について検討してきた。そこでは、知識の獲得に先立ち、身体を通して自己や環境との関係に気づくプロセスが重視されていることが確認された。

こうした視点は、特定の宗教的实践に限られるものではなく、身体を通して学ぶという人間の根源的な営みに関わる示唆を含んでいると考えられる。

では、この身体感覚に基づく気づきの構造は、現代の教育実践、とりわけアクティブ・ラーニングにどのような示唆を与えうるのだろうか。本章では、この点について検討を進める。

6-1. 身体中心性という視点

アクティブ・ラーニングは、学習者が主体的に思考し、対話し、課題解決に取り組む学習形態として広く導入されてきた。しかし、その多くは認知的活動や対話的活動に焦点が当てられ、学習者の身体状態そのものに着目する視点は必ずしも十分に議論されてこなかった。

だが、実際の学習場面においては、落ち着きのなさや緊張状態が思考や対話に影響を及ぼすことは多くの教育実践者が経験しているところであろう。逆に、身体が安定し、呼吸が整っているとき、学習者が課題に集中しやすくなる場面も見られる。

こうした点を踏まえると、アクティブ・ラーニングにおいても、学習活動の前提としての身体状態に目を向ける必要があるのではないだろうか。

本研究で扱ってきた身体感覚への着目は、学びを「頭で理解する営み」としてのみ捉えるのではなく、「身体を基点とした存在としての学び」として再考する視点を提示するものである。

筆者はここに、身体中心性という視点からアクティブ・ラーニングを捉え直す可能性を見ることができると考えている。

6-2. 学習前提としての身体状態

学びは常に、何らかの身体状態のもとで行われている。疲労しているとき、緊張しているとき、あるいは安心してるときでは、同じ内容を扱っていても学習への向き合い方が異なることは、多くの教育現場で共有される実感であろう。

しかし、教育実践においては、こうした身体状態が学習の前提条件として十分に意識されてきたとは言い難い。学びは主として認知的活動として捉えられ、身体状態は背景要因として扱われることが多かった。

本研究で見てきた身体感覚への着目は、まず自らの身体状態に気づくことを重視する点に特徴がある。呼吸や姿勢、身体の緊張に意識を向けることは、学習内容とは直接関係がないように見えながらも、自身の状態を知る契機となる。

このような気づきは、注意の向け方や課題への関わり方に影響を与える可能性を持つと考えられる。身体状態を整えることそれ自体が学習目標となるわけではないが、学びに向かうための土台としての役割を果たしうるのではないだろうか。

筆者はここに、学習の前提条件として身体状態に目を向ける必要性を見ることができると考えている。

6-3. 大学教育への応用可能性

以上の考察を踏まえると、身体感覚への着目は、大学教育におけるアクティブ・ラーニングに対しても一定の示唆を与える可能性がある。

例えば、授業開始前に短時間の呼吸への意識づけや姿勢を整える時間を設けることは、学習内容に直接関わらないように見えながらも、学びに向かう準備として機能する可能性がある。また、フィールドワークやグループワークに入る前に、自らの身体状態に注意を向ける時間を設けることも、学習者の注意の向け方を変える契機となりうる。

これらは特別な技能を必要とするものではなく、短時間で取り入れうる実践である点に特徴がある。ただし、本研究はこれらの教育効果を実証するものではなく、あくまで視点提示としての提案にとどまる。

今後は、こうした身体感覚への着目が学習過程にどのような影響を与えるのかについて、実践的検証を重ねていく必要があるだろう。

7. おわりに

本研究ノートでは、身体感覚に着目する実践を手がかりに、学びと身体の関係性について検討を行ってきた。とりわけ、身体を通して自己や環境との関係に気づくプロセスに目を向けることで、学びを認知的活動としてのみ捉えるのではない視点が開かれる可能性を示した。

本稿で扱った議論は、教育効果を実証するものでは

なく、身体感覚を基点とした学びのあり方を再考するための視点提示にとどまる。しかし、学びが常に身体を伴う営みである以上、その前提としての身体状態や存在感覚に目を向けることは、教育実践を捉え直す一つの契機となりうるのではないだろうか。

知識や技能の獲得にとどまらず、学ぶことそのものが自己の在り方に関わる営みであるとすれば、身体感覚を取り戻す試みは、学びと存在の関係を問い直す入り口ともなりうる。教育の現場に身を置く筆者にとっても、身体感覚に目を向けることは、学びの場そのものを見つめ直す契機となっている。今後は、こうした視点を実際の教育実践の中でどのように位置づけうるのか、検証を重ねていくことが課題となるだろう。

なお、本研究の出発点には、現代における身体感覚への独自の着目と、日本の伝統的実践における身体を通した修行の双方があったことを付記しておきたい。筆者が関心を持った身体感覚の探究は、実践者 SACHI TAKEKOSHI 氏の活動に触れたことを契機としている。また、修験道における身体を通した修行の伝統も、身体感覚を基点とした気づきの構造を考える上で示唆を与えるものであった。

本稿は、それらの実践を評価・検証することを目的とするものではなく、そこから立ち上がった問いを手がかりに、学びと身体の関係を考える試みであった。実践の現場から生まれた問いが、教育研究の視点から再検討されることには意義があると考えている。本研究もまた、そのような往還の一例として位置づけられるだろう。

身体に耳を澄ますことから始まる学びの可能性は、まだ十分に言語化されていない領域を多く含んでいる。本研究が、その探究の一端を照らす小さな試みとなれば幸いである。

参考文献

- i 今堀 洋子, 2024「アクティブ・ラーニングの視点から見た MOMED の可能性に関する一考察」成熟社会研究所紀要, 第8号, 1-7
- ii 今堀 洋子, 2025「教育現場での MOMED の実践に関する一考察」成熟社会研究所紀要, 第9号, 1-8
- iii 竹腰 紗智「存在革命」幻冬舎, 2026
- iv ジョン・デューイ「経験と教育」講談社, 2004
- v レイヴ・ジーン&ウエンガー・エティエンヌ「状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加」産業図書, 1993
- vi マイケル・ボランニー「暗黙知の次元」筑摩書房, 2003
- vii 今堀 洋子, 2024「アクティブ・ラーニングの視点から見た MOMED の可能性に関する一考察」成熟社会研究

所紀要, 第8号, 1-7

- viii SACHI TAKEKOSHI (HAPPY) のインスタ <https://www.instagram.com/reel/DFhXZdzytQc/> (2026年2月10日参照)
- ix 竹腰 紗智「存在革命」幻冬舎, 2026
- x 竹腰 紗智「存在革命」幻冬舎, 2026
- xi 今堀 洋子, 2020「修験道に焦点をあてたまちづくりの可能性」追手門学院大学地域創造学部紀要, 第5巻, 1-19

発酵食品と仕事づくり

神 吉 直 人

本稿は、京都市左京区で酒屋兼角打ちの店舗〔発酵室よはく〕を営む、料理家の真野遥氏による講演と、氏と著者との対談イベントの記録である。イベントは「シェアラボ 発酵 & 独立編」と題し、2025年7月1日に、著者の担当講義（現代企業論A）の時間に実施した¹⁾。真野氏は、様々な発酵食品を手づくりするワークショップを主催するなど、発酵食品づくりと並行して自らの仕事、およびキャリアもつくり出している。昨今経営組織論や組織行動の領域で注目されているジョブ・クラフティングやキャリア・クラフティングといった概念を想起させる氏の活動について、大学卒業後のキャリアも併せて受講生に伝えてもらうことが、本企画の意図であった。

以下の記述は、対談で実際に述べられた言葉をベースに、文章として読みやすいように、また発言の意図をより正確に表現できるように加筆や並び替えなどの変更を施したものである。

I. 真野遥氏講演

1-1. 現在の活動の概要

真っ当なキャリアをあまり歩まず、結構道を外れてやってきましたが、今はとても楽しく仕事をして暮らしています。真っ当なキャリア論については、きっと普段の講義で聴く機会があると思うので、「こういう生き方があるんだ」くらいに、少し笑って聞いてください。

京都市左京区の元田中にある自宅の玄関で〔発酵室よはく〕という酒屋をしています。酒屋というと、お酒がずらっと並んでいるイメージがあるかと思いますが、うちは冷蔵ショーケースが1つだけ。常温のお酒は手前のカウンターに置いています。敷地は約4畳半。玄関の土間と小上がりのそれぞれ2畳で小さく営業しています。おそらく日本で一番小さな酒屋ではないでしょうか。

ももとは料理家で、レシピを考えたり料理の作り方を教えたりするようなお仕事です。今は酒屋を営業しながら、同時並行でレシピの試作をしています。今日も午前中にレシピの撮影を終えてから急いで来ました。特に日本酒に合うレシピを強みにしていて、「この日本酒にはこんな料理が合いますよ」といったレシピを考えています。これまでに『いつものお酒を100倍おいしくする 最強おつまみ辞典』（西東社）と『手軽においしく 発酵食のレシピ』（成美堂出版）、あとは雑誌のムック本など何冊か本を出しています。企業のご依頼を受けて、商品を使ったレシピをつくってプロモーションをすることもあります。それらは、例えばメーカーのホームページに掲載されたり、パンフレットにさせていただいたりしています。

他には、講演やイベントに登壇することもあります。日本酒や発酵をテーマにしているので、それらの話をする人が多いです。また、東京にいた頃は料理教室をしていました。今は、ワークショップの形式で手仕事会を主催しています。昨年は上海で発酵のワークショップを3日間行い、茹でた大豆で味噌を仕込んだこともありました。

また、酒屋の活動の一環で、へしこの糠や八丁味噌、鮎寿司を漬けているご飯で飯と呼ぶものなど、いろいろな発酵食品を使って、日本酒に合う発酵おつまみクッキー缶というオリジナル商品を開発、販売しています。このような感じで依頼されたら何でもやりますが、活動の軸は日本酒と発酵です。

1-2. 学生生活～就職活動

私は1990年生まれのゆとり世代です。本当にゆとりを感じられる教育の中で育って来ました。大学は東京の法政大学で、人間環境学部を卒業しました。私が高校生だった2007年頃は、温暖化の議論が盛んでした。特にこれといってやりたいことはなかったのですが、周りの声に影響されたのか環境や世界の貧困問題

に問題意識を持ち、そこから人間環境学部という学部があると知って入学を決めました。

とても楽しい学生生活でした。ただ今になって思うのは、環境の領域は「環境問題を解決したい」という単純な入口から足を踏み入れるものなのだろうかということです。環境は、国際的な政治経済をはじめ、それぞれの分野から深掘りをしていくことが必要な、とても難しい問題です。なので、第一歩目を環境自体から入った私には難易度が高く、なかなか本質には迫れませんでした。どういう方向から学ぶべきかが見えず、学業に熱中できませんでした。

ゼミは貧困や国際協力といった分野を学ぶところに所属しました。ですが、勉強よりもサークルやバイト、さらに飲み会に明け暮れるなど、本当に自堕落な生活をしていました。とても楽しい学生生活でしたが、そんな日々にも就職活動は訪れます。2011年はリーマンショックを引きずった就職氷河期でした。加えて3月に東日本大震災もあり、募集人数は少なく、大企業への就職は本当に狭き門でした。まして、私はそもそもどんな会社に入りたいか、どんな仕事をしたいかなどが全然見えていませんでしたし、自己PRできることもありませんでした。ですので、エントリーシートの段階でほぼ落選、仮に面接に進んでも1次で落ちるなど本当に苦戦しました。

どのような業界を選ぶかという点には、ゼミのフィールドワークで伊豆大島を訪れたことが影響しました。伊豆大島は海に囲まれているので、飲み水などの生活に必要な水の確保が難しいのですが、そこでは海水を濾過して生活用水に使っていることを知りました。さらに濾過工場を見せてもらった際に、サランラップで有名な旭化成が濾過のための装置やフィルムをつくっていることを聞きました。日常生活に役立つサランラップのようなものの他にも、メーカーは私たちの知らないところで、いろいろな分野で素材を提供し、暮らしの基盤を支えてくれているんだと知りました。そのような素材が秘めた可能性を知り、単純にすごいと思いました。それで就職先として「じゃあ素材メーカーを目指そう」という発想になりました。

しかし、猪突猛進に素材メーカー1本に絞って、しかも総合職をめざして就活を行ってしまいました。これはミスでした。就職氷河期でなくとも、優秀な学生でもなかなかの狭き門なのに、私が入れるわけありません。50社ほど受けて全部落ちました。それまでの人生であまり苦勞をしていなかったこともあり、この失敗は初めて経験する大きな挫折でした。

1-3. 料理との出会い

最終的に、素材系の中小企業に就職しました。業界を広げればよかったのですが、どうしても素材業界から離れたくないという思いがありました。また、周りがどんどん内定をもらって行く中で「とにかく就職しなければ…」という焦りもあり、大学に募集がかかっていた社員17名程度、創業約100年の化学系の専門商社に就職することにしたのです。そこは、平均年齢55歳ぐらいで、新卒の同期が1人いましたが、私たちの前にはしばらく採用はなく、新卒が入ったことを驚かれるような会社でした。

入社後は営業職になりました。電子部品のコイルやモーターをつける接着剤や材料を担当しましたが、どうしても興味が持てず、なかなか独り立ちできませんでした。大きな会社であれば、そのうち別の部門に配属される可能性もありますが、小さい会社なのでそこ一筋でやるしかありません。また、職場に覇気がなくどんよりした空気で、鬱々とした気持ちになっていました。さらに、大学同期の入社先と比べると小さな会社に勤めていることにも劣等感を感じていました。

大学を卒業すると、社会に出てからのコミュニティができ、友達はそちらに行ってしまう。一気に友達がいなくなり、本当に孤独で憂鬱な時間を過ごしていました。そんな中、唯一の楽しみが料理でした。社会人になって一人暮らしを始めて、自炊をしたらとても楽しかったのです。実家暮らしでは気付かなかったのですが、料理が好きだということを初めて自覚しました。

それまでは視野が狭く、ものづくりといえば素材に関わるメーカーや商社など、工業系のこととばかりに考えていましたが、料理は自分がつくりたい、食べたいものを自由に創作でき、周りの人に喜んでもらうこともできる、身近なものづくりであると気付きました。初めてやりたいことに出会えた気がして、食の仕事ならがんばれそうだと思い、フードコーディネーターをめざし始めました。当時人気を集めていたSHIORIさんという料理家が私と近い世代で、「フードコーディネーターならできそう」という甘い気持ちもありました。調べてみると、フードコーディネーターの養成学校があることがわかりました。

1-4. 転職と修業

入社して2年目、1年目には勢いでがんばっていたことが耐えられなくなり、鬱ようになってしまいました。気力が湧かず、会社に行くと体調が悪くなるよ

うになってしまったのです。一度鬱になるとなかなか元には戻れないと聞いていました。そのため「これは身体と心からのサインだ。失うものも何もない」と思い、1年半で会社を辞めてしまいました。上司には「冬まで働いてボーナスをもらってから辞めてはどうか」と打診されましたが、「そんなことはどうでもいい」「早く辞めたい」という思いが強く、秋に退職しました。

会社を辞めた翌日から、奈良県の料理旅館で仲居として働き始めました。会社ではずいぶんと甘やかされるなど、ぬるま湯に浸かっていたような環境だったので、「こんな精神状態では駄目だ」と自分に鞭を打つ気持ちで、旅館の仲居という厳しそうな世界に飛び込みました。さらに、東京を離れてどこか遠くへ行きたいという気持ちもありました。そこで働いたのは契約期間の3か月程度でしたが、やはり厳しい世界で、マナーや言葉遣い、所作などが鍛えられました。

仲居の仕事を契約期間満了で終えてから、フードコーディネーターの修業に入ります。24歳でした。ここからもいばらの道でした。飲食店のキッチンや厨房で働いて料理のことを学びながら、養成学校に半年通いました。どれほど勉強になったかは少し微妙なところですが、そこで出会った先生や同期とは今でもつながりがあり、行ってよかったと思います。

学校に貼ってあったアシスタント募集の案内をきっかけに、卒業と同時に大御所料理研究家の先生に弟子入りしました。フードコーディネーターや料理研究家は、先生に弟子入りし、何年か修業を積んで独立している方がほとんどです。当時は安直に「先生のところに弟子入りしたら、道が開けるかな」と思って入りました。料理研究家の世界は厳しく、先生も厳しい方が多いです。私は何も知らずに、その中でも非常に厳しいと有名な一流の先生に弟子入りしてしまいました。

当時の私は、料理の技術も人間的にもとても未熟でした。技術的についていけない上に、精神的にも先生に認めていただくどころの話ではなく、3か月足らずで辞めてしまいました。拘束時間は長く、休みは月に2、3日程度。お給料は決して高くなく、貯金を切り崩しながら働きました。とても濃い3か月でしたが、ついていくことができず、辞めるしかありませんでした。

これが人生で二度目の大きな挫折でした。「これで行くぞ」と決めたことから立て続けに撤退してしまったので、そのときは本当につらかった。「そんなにすぐ辞めるならどこでも通用しないよ」ともいわれまし

たし、自分でも本当に逃げてばかりで駄目だと、とても悩みました。でも、そこから逃げることはできるけど、自分からは逃げられないということに気がきました。逆に「いろいろなことから逃げたとしても、自分からは絶対に逃げずに突き進むぞ」と、そのとき心に誓いました。「私はこうしか生きられない」と、自分の生き方を決めたのがこのときでした。

1-5. 派遣社員と修業

同じ時期に偶然、日本酒に出会いました。養成学校の同期をきっかけに、おいしい日本酒を飲む機会があり、おいしい料理と一緒に味わうと日本酒が料理を引き立ててくれることにとっても感動したのです。これもまた思いつきですが、日本酒に合う料理をテーマにしようと思いました。このときは「フードコーディネーターの立場から、日本酒に合うレシピを提案できたらいいな」と思っていました。

とはいえ、このときは真っ直ぐそちらには進めません。3か月間限られた月給で働いていたので、貯金がどんどんなくなっていました。一旦何でもいから働いて、お金を稼ぎながら考えようと、派遣社員を始めました。派遣社員はお給料がなかなか上がらないので、長い目で見ればずっと続けるのは厳しいです。でも、私はこのときまだ25、26歳で、短期的にはそれほど悪いお給料ではありませんでした。

しかも、働くことになったのは就活のときに第一志望だったメーカーの貿易部門だったのです。派遣の場合は、特別な面接を経なくても入れてしまうことがあるんですね。就活を失敗し、零細企業でしか働いたことがなかったのでOLに対する憧れもあり、それも手伝って2年弱ほど働きました。その間、貿易事務と庶務を担当しましたが、意外と仕事ができたようで、部長に気に入られ「社員にならないか」ともいってもらえました。それで自己肯定感を持ち直すことができました。

派遣社員はそこまで責任のある仕事がなく、定時で上がることもできるので、働いていてもあまり負担がありません。なので、派遣ならではの規則的な労働時間をフル活用しました。仕事終わりに、いろいろなご縁から呼んでいただいた日本酒会で料理をしたり、日本酒の勉強会に参加したり、とにかくたくさんさんの経験をしました。SNSが乱立した頃で、日本酒のキュレーションサイトがあったのですが、そこでレシピを発信していたところ、イベントのケータリングを担当するというご縁もありました。あとは、3軒の日本酒

バーで週1女将を担当し、日本酒をついだりおつまみを出したりしていました。結構濃厚な2年弱を過ごして、さまざまなつながりが生まれました。

イベントに出たり、お声がけをいただいたりしたことを支えに、派遣社員の契約期間満了と同時に26歳で独立しました。独立というと偉そうですが、無職の「自称フードコーディネーター」みたいなものでした。日本酒バーで女将をしながら、不定期で料理教室を開いたり、個別で受けたレシピ開発をしたり、あとは不定期で料理研究家のアシスタントをしていました。勉強と修業、インプット、アウトプットを同時に繰り返していた時期です。

さらに、仕事やプライベートで全国の日本酒の酒蔵さんを回っているうちに、発酵に関心を持ち始めました。日本酒はお米から造られているのに果物の香りがしたり、ジューシーだったりします。「発酵ってすごい」、「発酵についてきちんと勉強しよう」と思い、東京農業大学醸造学科の研究生になりました。日本酒のご縁で出会った農大の先生に制度があると伺い、研究生になれば好きに研究室に通えるということで、通い始めたのです。

実際には、いろいろな仕事をしながら研究室に通って実験をするのはなかなか難しいことでした。それでも少しずつ授業を受けたり、先生に質問したり、顕微鏡をのぞいたりして発酵を学んでいきました。ですが、大学に通ううちに「やはり研究はそもそも違う世界だ」と思うようになりました。研究者になるのではなく、私は発酵の知識を料理に生かすことに力を入れていこうと気付けた良い経験でした。

1-6. 働き方、再考と拠点

ここからいろいろな仕事に精力的に取り組んでいきます。27歳の頃でした。ライターとして取材をし、日本酒のメディアに記事を書いたり、ケータリングやスタイリングの仕事を受けたり、楽しくもありましたが結構大変だった時期です。少しずつ自分の仕事が増えたのですが、依頼されたことを幅広く何でもこなしていくと、すべてが手薄になってしまいがちでした。あまり得意ではないこともしていたので、クオリティーにあまり自信が持てなかったり、一つひとつの準備に時間がかかったりもしていました。

また、イベント系の仕事は平日の夜や休日を中心なのですが、この少し前に結婚していました。夫は銀行員のため、すれ違いが多くなっていました。なるべく平日の昼間にできる仕事がしたいと思って働き方を模

索し、自分なりの働き方改革を始めました。

その一環で、28歳のときに料理教室をスタートします。料理教室は、それまでにもいろいろなところで不定期に開催していたのですが、きちんと拠点を1つ持とうと思いました。拠点を決めない自由な働き方も好きですが、やはりその都度異なるところで仕事するのは大変です。また、「何が本業なの?」「どこが拠点なの?」「メインの仕事は何?」と聞かれることが増えていました。すべてがメインのつもりでしたが、自分のことを客観視すれば「確かに何をやっているかわからない人に見えるな」と思いました。主軸となる活動をつくりたいとも考えて、拠点を定めることにしたのです。

料理教室は、新宿御苑前に借りたシェアオフィスで開きました。そこは珍しい業態で、料理家向けのシェアオフィスでした。個室のオフィスにキッチンが併設されていて、そこを借りているとキッチンを優先的に、少し安く使えたのです。料理教室やケータリングの仕込み、イベントなどがしやすかったし、持ち込んだ道具を置いておけるのもとても便利でした。

オフィスを拠点として持つと、月額賃料がかかるので売上げがないと赤字になります。そうして少し自分を追い込み、心に火がつくことを狙って、あえて固定費を発生させたところもあります。実際、毎月の支払は大変でした。最初はなかなか生徒さんが集まるものではなく、ホームページやいろいろな媒体で募集をかけましたが、苦戦しました。

春に始めた料理教室ですが、コツコツ続けているとだんだんリピーターが増え始め、秋には満席続きになりました。初めて雑誌のお仕事をするようになったのもこの時期です。この頃から仕事が安定してきました。拠点をつくってよかったと思います。

料理教室のテーマは「日本酒と発酵食のペアリング」でした。日本酒から入ってくる方もいれば、発酵食への興味で参加される方もいましたが、日本酒と発酵食はとても親和性が高く、どちらも好きになってもらえるという相乗効果がありました。ここから、日本酒と発酵食が自分の揺るがないテーマになっていきました。

1-7. 軸の確認

20代の終わりから、どんどん飛躍したように思います。まず、料理教室は5年間継続できました。こんなに何かを継続させたことはなく、これは自分の快挙です。リピーターがとても多く、賑やかな人気料理教

室になりました。note のフォロワーさんが1万人以上になったり、やりたい仕事が増えたりもしました。

目標の1つだったテレビにも出ました。発酵関連のレシピのお仕事で何本か出ささせていただき、『スッカリ』にも出演しました。2020年の緊急事態宣言の前頃の放送でした。周りからは「すごいね」と言われましたが、たまたまお声がけしてもらっただけでした。そのとき、普段地道にやっていることよりも、テレビに出ることの方が評価されたことに自己評価との乖離を感じ、人からの評価を受けることに私は意義を見出せないんだと気付きました。

また、テレビは演出に合わせて自分をつくるなど、どうしてもメディアの意向に合わせなければいけないことがあります。何本か出演しただけなのに偉そうですが、この経験から、他者からの評価や期待に沿うよりも自分が納得いくことを大事にしたいと思い始めました。

この頃は順風満帆でしたが、実はその10年程前から京都に住みたいという思いがありました。京都は自然と都市が近く、生産者さんと消費者の距離も近い。さらに新旧の文化が融合している、街がコンパクトで自転車があればどこでも行けるなど、好きなところがたくさんあり、以前から遊びに来ていました。食の仕事始めて、その気持ちがさらに強くなったのです。そうして、30歳になるタイミングで東京と京都の二拠点生活を始めました。

最初はシェアハウスに住んで、行ったり来たりしていました。東京では仕事をし、京都ではとにかく遊んでいました。野草を摘んで料理をしたり、ニワトリをさばいたり、琵琶湖で漁師体験をしたり、友達の田んぼを手伝ったり、しば漬け仕込みをお手伝いしたりと結構ワイルドに、食を中心に活動していました。東京などの街では、買って来たもので料理するのが当たり前です。ですが、その場にあるものを料理したり、しば漬けのような伝統的な発酵食品に触れたり、食の本質的な部分と触れ合うような経験をして、そのようなことがすごく大切だと思うようになりました。

これまでお話してきたように、20代前半は思い付きに沿って安直に選んで、突拍子もない行動をしてきました。20代後半は、ずっと温めてきたこととタイミングが重なったら行動あるのみ、とにかくタイミングを逃さないという感覚になっていました。京都に移住し、開店したのはタイミングが合ったことによります。そして、現代社会に足りないのは「よはく」だと思ひ、この屋号を掲げました。

II. 対談

2-1. 休業時代の振り返り

神 吉：ご講義ありがとうございました。最後に急かしてしまい、余白のない展開となりすみません。ここからはお話の中で気になったことをお尋ねしていきます。

真野さんのキャリアのお話の中に、「ときどき自分を追い込む」とこと、「ときどき振り返る」とことの2つが何度か出てきたことが特徴的でした。後者の「ときどき振り返る」とことについて、そもそもキャリアは回顧的意味付けと定義されています（金井，2002）。また、振り返ることは、経験学習で重視されているリフレクション（reflection；内省）に相当します（松尾，2011）。時々立ち止まって、経験したいろいろなことについて自ら振り返り、それらに意味を見出していくことは、次の行動につながります。

そして、真野さんの場合はそれに次いでなされる行動の多くが、ここにいる学生からしたらおそらく意味がわからないのではないかと思うくらいに突破してしまっている、人が半歩くらいにとどめるところで5歩や10歩踏み出しているという印象の、とにかく豪快なものでした。新卒で入った東京の会社を辞めた翌日から奈良の旅館で働いたという話などがそうですね。いろいろ伺いたいことがありますが、お酒の話をご期待して来てくださった職員さんもおられます。活動の転機となったお酒があれば教えてください。

真野氏：青森の「^{ほうはい}豊盃」です。フードコーディネーターの養成学校に青森出身の同期がいて、彼女が郷土料理をつくるミニ料理教室を企画してくれたときのことです。そのとき、私たちがまったく知らないおじさんが参加されていました。話してみると日本酒好きで、独自で日本酒のネット番組をしている方でした。その方が持ちこまれていた豊盃がおいしくて、がぶがぶ飲んでたら「飲みっぷりがよいね」となって、その番組に出ることになりました。YouTubeなどない頃の、超ローカルなネット番組でしたが、大きな転機になりました。

身内だけのミニ料理教室のつもりだったのですが、伝手をたどってそういう場に潜り込める

ほど人脈をお持ちの方でした。その後いろいろな会に誘っていただいたり、日本酒の蔵元さんを紹介していただいたり、おかげで縁が広がりました。

神 吉：「まったく知らないおじさん」から一気に番組出演というのも踏み出していますね。それはさておき、同期の方と一緒に、自分たちでつくったコミュニティが自分たちだけで閉じずに、そこでいろいろな出会いがあることは、なかなか稀有ですし、とても素敵なことだと思います。経営学の概念では、良質の実践共同体（community of practice）といえます（Wenger et al., 2002）。

守ってくれる組織に所属せず、フリーで生きていくためには様々な関係性、いわゆる社会関係資本（social capital）が必要です（Lin, 2001）。いろいろなところに顔を出しつつそれを築いていくことは、実は不自由なことでもあります。そこも楽しんでおられたのだと想像します。とはいえ学びながら、しかもしっかり働きながらそれを行うのは相当大変だったと思いますが、できた要因は何だったのでしょうか。

真野氏：若さです。今、そんなことはできません。20代前半から半ばまでの体力やアグレッシブさは、我ながらすごかったと思います。その頃に日本酒に出会って、突き進むことができてよかった。今だと慎重になってしまっていますが、突き進めるうちはとにかくたくさんやった方がよいと、振り返ってみて本当に思います。

神 吉：当時は「眠いし明日もあるから早く寝よう」とか「お金が底をついたらまずい」とか「将来に向けて貯金しよう」とかいった、守りの気持ちはなかったのですか。

真野氏：ありませんでした。人生どん底時代、料理研究家の先生の弟子を3か月で辞めたときが本当にどん底だったので、もうあれ以上落ちることはない。少しでもよい方に進めそうだと感じたら、躊躇なく行動していましたね。

神 吉：昼間は企業勤めの月曜から金曜の夜にお店で働く場合、活動時間や睡眠時間は具体的にどの程度でしたか。

真野氏：定時が5時か5時半だったのですが、急いで会社を出て6時か7時ぐらいいから日本酒バーで働いて、11時に終わり、帰って寝る。朝は満員電車には乗りたくなかったので、誰よりも早

く会社に行っていました。それだけで部長に褒められましたが、やっていたのは仕事ではなくてブログです。その頃は、日本酒関係のいろいろな活動や料理をしていたので、朝早く出社して会社のパソコンからアメブロでブログを書いていました。

神 吉：新卒のときには入れなかった、しかも第一志望の会社に派遣で入り、そこで認められて「社員にならないか」と言われる。そういうルートもあるということをお話してくださったことは、学生へのメッセージとしてありがたいことでした。他にもゼミのフィールドワークで出会った関心を軸にそのまま就活を突っ走ったとか、その会社には落ちたけど結局は入ることができたとか、普段の授業ではあまり語るができない事例をリアルに語っていただきました。

1社目、平均年齢55歳ののんびりした会社で甘やかされたとのことでしたが、そこでのんびりし続ける人も少なくないと思います。そうしようと思ったらできたけれども、そこから飛び出していったことも印象的でした。

パラレルワールド的想像で、もしその会社の商材にはまっていたら持ち前のこだわりが発揮されただろうし、定年の近い方が多かったことを「数年後にはチャンスが来る」と思っていたら、今頃経営層にいたかもしれない。真野さんの勢いや行動力は、いろいろな人生を想像させてくれます。

2-2. 失敗への態度

神 吉：ここでまた大きく話題を変えますが、発酵のおもしろさはどのような点にありますか。

真野氏：発酵のおもしろさは余白にもつながるのですが、失敗とそれを解決するロジックに感じているように思います。実は「発酵を勉強するぞ」と本当に思ったきっかけは失敗なんです。私の行動はしばしば失敗から始まるのですが、本当に安直な性格なので、興味をもったらよく調べもせずにやってしまうんです。

神 吉：多くの人ができない理由ややらない理由を探してしまっていて行動できない中、まずアクションできるのはすごい才能だと思います。どんな失敗だったのでしょうか。

真野氏：甘酒でした。甘酒はご飯と麴とお水を混ぜて、60度で8時間ほど保温するとできるので

すが、保温方法がわからず、ちょうど冬場だったのでこたつに入れてみたんです。「放っておけば甘くなるかな」と思ってこたつに入れておいたら、見事に腐ってしまいました。40度や50度など、狙っていたよりも低い温度で置いておくと、麹菌が酵素を出して糖化する前に雑菌が増えてしまいます。

今思えば、先に調べればよかったことなんです。とにかく失敗したのがショックで。「なぜこれは失敗したのだろうか」と後から調べ始めて、「なるほど、きちんとロジックがあるのだな」とわかっていくのがおもしろかった。見えないけれど、いろいろな菌が働いて、いろいろなものがつくられていくロジックの存在を知ったのが最初のきっかけでした。本当に複雑で、目には見えないのに何か変化していく。日本酒はお米から造られているのに、米ではない味がする。そういったよくわからなさに興味を持ったのも大きいです。

神 吉：失敗に関して、「1回失敗したら、もう二度とやらない」という人も少なくありません。派手な失敗にもかかわらず、そこで「自分で調べてもう1回やろう」と思えることも、真野さんの強さだと思います。

2-3. 発酵食品の自作と仕事

神 吉：今はお店で発酵食品づくりのワークショップも行われていますが、そうした仕事も含めて、どんなものをつくっていらっしゃいますか。

真野氏：味噌、柚子胡椒、らっきょう…。柚子胡椒は麹でまろやかに仕上げます。いろいろなシロップもつくっています。もともと保存食として成り立ってきたものが多いです。味噌が一番身近で複雑な発酵食品だと思います。“手前味噌”はおいしいですよ。季節のものでは、これからしば漬物を仕込みます。あと、鮓ずしは毎年漬けています。最近はなれずしにはまり過ぎていて、いろいろなものを楽しんでいます。

神 吉：梅干しはつくっていないのですか。

真野氏：梅干しは発酵ではありませんね。

神 吉：塩漬けにする過程で発酵しているのだと思っていました。漬物のイメージに引っ張られてましたね。お店で出来合いのものを買うこともできるのに、発酵食品を自作することの魅力は何ですか。

真野氏：育てる楽しさがあることです。コントロールできない菌と食材の環境を整えることは、育んでいる感覚です。味噌などの蔵元さんや発酵食品のつくり手さんとお話すると、「菌がつくってくれるから自分は手を添えるだけ」だとよく仰います。

コントロールできないので、例えば味噌は同じ仕込み方をしても毎回味が違います。本当にどうなるかわからない。失敗することもあるし、とても上手くいくこともある。少しギャンブル性がありますね。

神 吉：そのギャンブル性にも魅かれていますでしょうか。この講義ではジョブ・クラフティング (job crafting) という概念を、つまり自分で仕事をどのように工夫するか、特に上司などからの指示の下で行う仕事が多い中で、やらなければならない仕事をいかに自分でクリエイティブにしていくかということをお話してきました²⁾。タスクの中には勝手な変更が許されないものもありますが、与えられたもの、言い換えれば他者の意図に従うだけの仕事をするだけでなく、何らかの自己決定をすることがモチベーションなどの観点から望ましいです³⁾。さらにいうと、前提として自ら変更できる余地がある、自分は世界の一部だけでも変えることができると思っているかどうか肝心です。

自分たちでできる余地を広げる、余地を取りに行くことは、仕事だけでなく料理でもできる。食べるものを自分でつくるという行為には、世の中の見方、捉え方を変える効果があるのではないかと思います。真野さんは、自分でいろいろなものをつくるという営みを、どのように捉えていますか。

真野氏：生活に必要なものをある程度自分でつくれることには安心感があります。自活力というのでしょうか。お金を出せば何でも買える時代ですが、お米が高くなるなど今後どうなるのかと思うところもあります。買うお金がなくても、売っていなくても、自分でつくったものがある。これはサバイバル力の1つだと思います。お金の依存しなくても、自分の生活を、暮らしを安定させていけることは、安心感や自信にもつながります。

神 吉：今のお話のようなことを、軽井沢の隣の御代田という町に集まっている企業家の人たちから

伺ったことがあります。その人たちはいわゆるホワイトカラーの仕事をしているんですが、これからは現場の力が不足するといつて、電気工事士など資格を取って自分でできるように準備していました。これからは「電気工事を自分でできないとやばいぞ」と。その人たちは危機感もあるけど楽しそうで、今思うと真野さんと同じ匂いがしました。

真野氏：パンク精神にも近いですね。反体制の1つかもしれないです。

神 吉：アナキズムともいえそうです⁴⁾。

2-4. 計画と行動

神 吉：独立に際して、稼げないことへの恐怖などブレキとなるようなことはなかったのですか。

真野氏：ありませんでしたね。やはり最初に挫折したことが大きかったように思います。就活がなんだかんだでうまくいって、そこそこの会社に入っていたら、手に入れたものを失いたくなくなっていたかもしれない。私はそれが最初からなかった。失うものがないという状態で、ある意味無敵の人になっていたのかもしれない。

神 吉：先ほどもいいましたが、失敗したら、もう二度と失敗したくないと思って行動できない人も少なくありませんが。

真野氏：そこは性格かもしれないですね。もともと樂觀的で根が明るく、あまり悪い方には考えない質^{なま}です。ただ、この生き方を人には勧めません。やはり性格は人それぞれです。心配性でいろいろなことを不安に思い、堅実にやっていくのが向いている人もいれば、私のようにそういう風には考えられないタイプもいる。それぞれの人に合った生き方があるとは思いますが。

神 吉：お店を始めるにあたって、何かをしっかりと計算したなど、よく考えた点はありますか。

真野氏：店を始めるのはさすがに勇気が要りました。考えたのはやはりお金です。開業資金や毎月の家賃、電気代、リース代。固定費をかけて始めたことは簡単にやめられないですし、借り入れた分を返済できるのかなど、さすがにいろいろと不安で慎重にもなりました。

神 吉：1日の平均来客数や売上など、どの程度の目途がありましたか。

真野氏：目途は立っていなかったのですが、結局「何とかなるかな」と思って始めました。酒屋を始

めるには酒販免許が必要で、そのためにはいろいろな書類を税務署に出すのですが、その中に事業計画書のようなものがあります。月々の売り上げや支払いなどをExcelで試算しましたが、まったくその通りにはなっていません。

神 吉：お店以外にワークショップやレシピ開発などもされていますが、差し支えなければ、売り上げ構成比を教えてください。

真野氏：開店前に周りからもいわれていましたが、正直にいうと、酒屋はなかなか儲からないことを実感していて、料理家の仕事で補填しています。在庫を持つビジネスなので、毎月の支払いがあります。仕入れて、売って、その差額で儲けるという、結構厳しい世界に踏み込んでしまいました。本当に小さな規模でやっているのは少し不安だったので、自宅の玄関ぐらいにしておいてよかったです。

神 吉：ワークショップはどのくらいの頻度で開催されて、何人ほど来られていますか。ワークショップは、毎回あつという間に満席になっているという印象です。

真野氏：東京の料理教室は月に5、6回で各回8人だったので、40、50人ほどでした。今はそこまでの余裕がなく、ワークショップは月3回くらいで5名ずつですね。リピーターが多くて、近所の方もいれば、大阪、神戸、遠くは福岡や名古屋の方も来てくださいます。

神 吉：福岡から京都まで、何をつくりに来られるんですか。

真野氏：キムチです。料理教室と違って、手仕事会は毎年同じ内容なんですけど「今年も仕込みたい」といってくださる方が多いです。東京の料理教室は、毎月新しいレシピを4品考えるのが結構大変でした。それ自体が自分自身の勉強になり、経験にもなったので最初は突っ走れましたが、「これを30代もずっとやっていくとなると大変だ」と感じました。なので、少しペースダウンして手仕事会に切り替えています。毎年仕込むレシピを少しずつブラッシュアップするのですが、それは気楽にできています。

神 吉：自分でつくるといふ経験をいろいろと積む機会は、非常に大きいと思います。大学生が参加しても大丈夫ですか。

真野氏：もちろんです。近所の大学生も来ています。

大学生にお話ししたかったことを思い出したのですが、その話をしているんですか。

私は「好きなことを仕事にする」というのは呪いの言葉だと思っています。「好きなことを仕事にする」という言葉には陥りやすい罠があって、好きなことをするためには必要なことがいろいろあることが隠されるんですね。その必要なことが、その人にとっては好きでなかったり、できないことだったりするととてもつらい。逆に「好きじゃないことはやらない」ように整えていくことが、もしかしたら好きなことを仕事にすることにつながるのではないかとも思います。

具体的なイメージを持たず、「何となく憧れがあって」とか、「何かすごくキラキラしていて素敵」とか、「何となく料理が好きだから」とか、そんな感じでいろいろ始めてみると、想定していなかったマイナスに気付いて、うまくいかないことも少なくないと思います。

何となくではなく、好きな仕事をしている自分の具体的なスケジュールを考えてみる。朝何時に起きて、どんな準備をして、どんな風に働いて、何時に寝られるとか、それらをやる時はどんな気持ちかなとか、家族との時間を持つかなとか。いろいろやってきてわかってきたことですが、具体的な、そして現実的な1日のスケジュールまで考えた方がいいと思います。「どの口がいうのか」と思われるかもしれませんが。

そして、「好きなことを仕事にする」というというのは、「好きなこと」、「できること」、「求められていること」の重なる部分を仕事にすることだと思うんです。私は、好きなことに飛びついていろいろやってきたように思われるかもしれませんが、好きなことのうち、自分ができるところから始めてきました。幸いなことに、それを人から求めていただけた。それを続けたことで、少しずつ「好きなことを仕事にする」という状態に近づいてきたかなと。私は、結果的に好きなことを仕事にできているんだと思います。

それから、仕事の適性について考える上で、自分の中で変えられる部分と変えられない部分を混同しないのも大事だと思っています。そこを混同すると、迷ったり、自分をダメだと思

たりしてしまう。変えられないのは性格。あとは天然ボケとか。もちろん自覚はないのですが、私は昔から天然ボケだといわれます。空気を読めなかったりすることもどうしようもない。ADHDなどは薬を飲めば改善するかもしれませんが、やはりなかなか変えられないことです。

でも変えられる部分は必ずあります。勉強をして知識を得たり、思考法を変えたり、技術を磨いたり。朝起きるのが苦手でも、習慣を見直せば変えられるかもしれない。それから人とのコミュニケーション。天然でADHDだとしても、それをばれないようにコミュニケーションをとるための方法論もたくさんあるので、そういった部分は努力する余地があります。

変えられない部分について、「これを変えられる」、「努力すれば何とかできる」と思うと行き詰まってしまう。私は「自分から逃げない」と決めたときに、変えられないものはきっぱり諦めました。むしろそれを強みにしようというくらいの姿勢でいます。「好きなことを仕事にしているいいね」といわれますが、そのようにしかできなかったともいえます。就活は失敗して希望の仕事に就けませんでしたし、料理修行も挫折していますし、できないことばかりです。だけど、逆にできないこと全部切り捨てて、できることだけ、得意なことに全振りした結果、あまり他にはない働き方ですが、酒屋をしながら料理家をしている。自分が生きやすい環境を自分でつくっていることは、手づくりや発酵の仕込みに近いと思いますね。

神 吉：「酒屋をしながらの料理家は他にはない」と仰いましたが、今までにない仕事をつくるというお話はとてもおもしろいです。僕たちの共通の知人に小倉ヒラクさんという人がいて、発酵デザイナーとして活動されています。そのように、何かと何かを組み合わせた仕事をしている人、つくり出している人がどんどん増えてきています。もともとなるのは既存のありふれた物事でも、組み合わせ次第で今までになかったものとなる。まさにシュンペーターがいう新結合です（Schumpeter, 1911）。

学生のみなさんには、新しい道を拓く可能性はみなに開かれているといいたい。できることに真摯に、熱心に取り組めば、経験からの学習

が進んで組み合わせのもとになる選択肢が増えます。そして何より「環境は自分で変えられる」というマインドセットでいてほしいと思っています。仕事など、自分が生きていく環境はある程度周囲から与えられるものです。ですが、与えられた環境は変えられず、その中で何とかやるしかないと思いついでいるか、それとも変えられないものもたくさんあるけど、環境のうちのいくらかの部分は変えられる可能性があると思つて、それに向かって行動できるかどうかは、大きな違いになると思つますね⁵⁾。先ほど真野さんは自分の中の変えられる部分とそうでない部分のお話をされましたが、環境は変えられないと決めてしまった上で、自分の変えられない部分をどうにかしようとしてしまうことが、今生きづらさを抱えている人の状況なんじゃないかと思つました。

真野氏：できないこと、変えられないことによる失敗に囚われている人は苦しいでしょうね。私も失敗は本当にたくさんしてきました。ですが、社会人になってからの失敗は悪いことばかりではありませんでした。社会に出るまでは特別やりたいことがなかったから、挑戦も特にしてなくて、失敗してこなかったのかもしれませんが。

やりたいことができて、そこで失敗したから「じゃあ次はこの方法でやってみよう」とか、「こうがんばるしかないな」とか思つて、道が切り拓けたのだと思つます。失敗で拓ける道もありますが、失敗して苦手なことがわかつて「これはやめよう」と考えられることもあります。そうしてるうちに、どんどん生きやすくなりました。おかげで今が本当に一番楽しいと思つます。

先日、醸造蔵ツアーの打ち上げで行つた居酒屋のおじさんがおもしろ過ぎて、笑い泣きをしていたところを、友達が写真に撮ってくれました。まっとうな道を歩んでいたら、いい年をして、たわいもないことであれほど笑い泣きできなかったと思つます。順風満帆にいかなかったからこそ、思いもよらなかった、知らなかった道に突き進めた。こんな人生になるとは思つていませんでした。だから、みなさんも思いもよらない道が見えたとき、そちらに進むことも楽しんでいただきたいと思つます。

神 吉：時間となりました。最後に、お店の今の一押

しの組み合わせを伺つて終わりにしたいと思つます。

真野氏：おすすめのペアリングは、「花巴」の水配みずもとと鮎寿司のご飯を使ったチーズケーキです。花巴の水配は、奈良県の正暦寺でお坊さんが生み出した技術です。水配仕込みや菩提配仕込みという、生のお米を水に浸して乳酸発酵させたものを元にして造られています。いろいろな雑菌が湧くので、かなり独特な風味があり、少しチーズっぽい感じもします。それに鮎寿司のチーズケーキがとても合うので、ぜひ試しにお越しください。

注

- 1 同講義の受講者に加えて学生2名、学内の教職員が3名ずつ、および1名の学外からの参加者が聴講した。
- 2 ジョブ・クラフティングは、「個人が自らの仕事のタスク境界、もしくは関係的境界においてなす、物理的・認知的変化と定義されている」と定義される (Wrzesniewski & Dutton, 2001)。
- 3 自己決定理論では、自己決定的であるかどうか動機づけの程度に影響を及ぼすと考える (Ryan & Deci, 2000)。
- 4 文化人類学者の松村圭一郎はアナキズムを、「国家や政府の否定にとどまらず、あらゆる権力的なものに向きあう方法を考える視点」と表現している (松村, 2021: p.74)。
- 5 プロアクティブ行動の初期の提唱者である Bateman & Crant (1993) は、プロアクティブ行動を現状の環境を変えていくものとしたが、その前提として、人は環境を変えることができることを挙げている。プロアクティブ行動は、Crant (1995) によれば機会をみつけ、周囲ないし自身の環境を変えるような行動を開始するような裁量的行動であり、ここまで述べられてきた真野氏はこれに相当するものである。

参考文献

- Bateman, T. S., & Crant, J. M. (1993). The proactive component of organizational behavior: A measure and correlates. *Journal of Organizational Behavior*, 14, 103-118.
- Crant, J. M. (1995). The proactive personality scale and objective job performance among real estate agents. *Journal of Applied Psychology*, 80 (4), 532-537.
- Lin, N. (2001). *Social Capital*, Cambridge University Press.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55 (1), 68-78.
- Schumpeter, J. A. (1911). *Theorie der wirtschaftlichen entwicklung*, Duncker & Humblot (塩野谷祐一・東畑精一訳『経済発展の理論—企業者利潤・資本・信用・利子お

- よび景気の回転に関する一研究〈上〉』岩波書店, 1977年).
- Wenger, E., McDermott, R., & Snyder, W. M. (2002). *Cultivating communities of practice*, Harvard Business School Press. (櫻井祐子訳『コミュニティ・オブ・プラクティス』翔泳社, 2002年).
- Wrzesniewski, A., & Dutton, J. E. (2001). Crafting a job: Revisioning employees as active crafters of their work. *Academy of Management Review*, 26 (2), 179-201.
- 金井壽宏 (2002). 『働くひとのためのキャリア・デザイン』PHP 研究所.
- 松尾睦 (2011). 『「経験学習」入門』ダイヤモンド社.
- 松村圭一郎 (2021). 『くらしのアナキズム』ミシマ社.

プロジェクトレポート

学生チームによる小豆島プロジェクトの活動報告 2025

—地域社会から「必要とされる存在」を目指して—

中 川 啓 子

I. 概要および過年度の取り組み

追手門学院大学（以下、大学という）成熟社会研究所（以下、成熟研という）が実施する地域連携プログラム「小豆島プロジェクト（以下、プロジェクトという）」は、学生研究員主体の産学官連携活動で、2025年に9周年を迎えた。

2016年度に実施した小豆島のIターン・Uターン者を対象とした共同研究調査がプロジェクト化し、姉妹都市である茨木市と小豆島町を大学生がつなげて新しい価値を生み出しながら活性化していくことを目的に、様々な連携交流企画を継続的に実施している。

また本プロジェクトは、希望者による任意プロジェクトであり、授業やゼミといった正課活動ではないため、学生らの自主性によって成り立っている。

プロジェクトの顔ともいえる取り組みが、両都市がコラボしたクラフトビール（しそとことんシリーズ）の商品化とその販売である。その他、コラボランチメニューの発案・販売、両都市の高齢者や高校生、子どもとの多世代交流イベント、両都市の魅力を再発見する取り組み、各種祭りイベントへの参加など、活動は多岐に渡っている。

初代メンバーから引き継いでいるプロジェクトのゴールは大きく二つ。【小豆島の秋祭りへの参加】と【島でのインターンシップ開催】である。それらを意識しながら、島民との関係性を深め、島の人たちに「おかえり」と言ってもらえるような存在を目指して日々奮闘している。

本稿では、2025年度の活動を紹介しながら、特に学生の成長が見られた部分や、変化している地域との関わり方などに着目していきたい。

なお、過去に6回掲載報告しているレポートは以下の通りである。プロジェクトの立ち上がりから過年度の取り組み詳細は以下を参考にされたい。

また、学生メンバーとしてプロジェクトに参加した

のち、大学院進学後も「総合プロデューサー」という立場で後輩メンバーをサポートした小林史門氏（卒業生）の報告も、2022～2023年度の活動を知る上で貴重な資料となっているため、併せて記載する。

-
- 1：学生チームによる小豆島調査—Iターン・Uターン、産業から瀬戸芸まで～島外の若者視点を通じて—（中川，追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要 第1号，2017）
 - 2：学生チームによる小豆島プロジェクトの活動記録—赤しそクラフトビール商品化までの産学連携と学生の成長の軌跡—（中川，追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要 第5号，2021）
 - 3：学生チームによる「小豆島プロジェクト」6年目の進化と変化—コラボクラフトビールがふるさと納税返礼品になるまで—（中川，追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要 第6号，2022）
 - 4：学生チームによる小豆島プロジェクトの活動報告 2022—7年目，新たな交流企画の提案と取り組み—（中川，追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要 第7号，2023）
 - 5：学生チームによる小豆島プロジェクトの活動報告 2023—産学官連携の取り組みの多様化—（中川，追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要 第8号，2024）
 - 6：小豆島プロジェクトでの活動を振り返って—2022年度・2023年度の活動に着目して—（小林，追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要 第8号，2024）
 - 7：学生チームによる小豆島プロジェクトの活動報告 2024—メンバーの参加動機・目的意識について—（中川，追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要 第9号，2025）
-

II. 2025年度の活動

2-1. メンバー構成

2025年11月時点のメンバーは合計16名であった。11月のイベントを終えると、6期生4名(4年生)がプロジェクトを卒業し、また現役生1名も活動を休止することとなったため、2026年1月時点では合計11名となっている。構成としては、6期生3名(3年生)、7期生6名(2年生)、8期生2名(1年生)である。6期生は地域創造学部と社会学部、7期生は地域創造学部と経営学部と心理学部の学部混在チーム、8期生は地域創造学部のみとなっている。なお、男女比は、5:6である。構成状況は表1に示す。

本稿執筆時点では、7期生が中心となって運営しつつも、6期生が全体を見守り、8期生も自立に向けて動いている状況である。

メンバー募集に関することは、後述する。

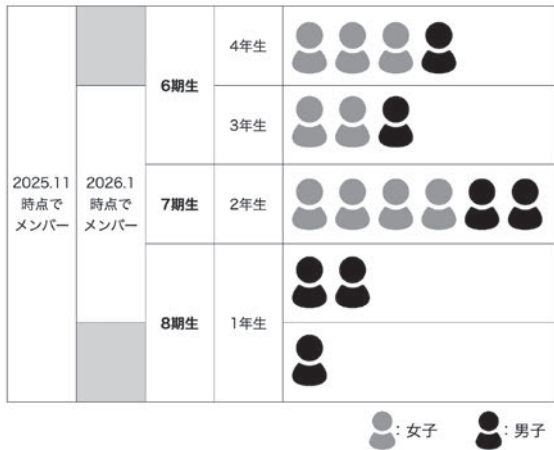


表1 2025年度プロジェクトメンバー構成

2-2. 活動内容

2025年度は小豆島・茨木市の各所と連携した様々な取り組みがこれまで以上に展開された。表2にピックアップした12の取り組みカテゴリのうち、6割の7つが前年2024年度も実施した継続的的案件であるが、同カテゴリ内での取組数自体は複数回実施しているものも多く、継続カテゴリの中での新規開拓が進んでいる状況である。

また前年度実施がないものには、完全な新規取り組み以外に、過去に先輩メンバーが実施したものが含まれている。

各企画の実施に於いては、企画・調整してまとめるメイン担当者(リーダー、窓口、プロデューサー的役割)を中心に、複数あるいは残り全員のメンバーが作

業や運営にあたるという形は例年と変わらないが、同期生の中でのつながりや学年を越えた連携は、より強くなっている印象がある。

実施日_取り組み内容(関係協力連携先) ※カテゴリ別時系列	2024年度 実施あり
(1) コラボビール販売 4/19_茨木蚤の市2025~春~への参加 5/10_山手台マルシェへの参加 7/12_駅前マルシェビアガーデンへの参加 7/14-15_教職員限定コラボビールお渡し会 9/21_かどや酒店有料試飲会 (まめまめびーる, かどや酒店, FIC ベース株式会社, 茨木商工会議所, 山手台街づくり協議会)	●
(2) 8/5_オリーブフレンドリーキャンプ (茨木市, 小豆島町, 追大パーク)	●
(3) 8/25_茨木市への訪問・ヒアリング (茨木市まち魅力発信課)	●
(4) 8/27-28_瀬戸内国際芸術祭視察	
(5) 10/14-16_小豆島秋祭りへの参加 (小豆島町坂手地区)	
(6) 10/20_「わたしのみらいゼミ」との交流 (小豆島中央高等学校)	
(7) しまはらさん企画 10/25_茨木市内フィールドワーク (ダムパークいばきた, 茨木市立川端康成文学館, 茨木市立キリシタン遺物史料館)	●
(8) 姉妹都市コラボランチ企画 「ラーきく練り天」「塩レモン練り天」 (藤熊食品, 丸虎食品工業, 実都農園)	●
(9) オンラインスポーツ大会 6/25_茨木高等学校との交流会 11/18_第1回 vs. 常清の里 1/17_第2回 vs. サンシャイン会 (高齢者総合福祉施設 常清の里, 小豆島社会福祉法人サンシャイン会, 茨木高等学校)	●
(10) 11/29-30_お手伝い企画 - ①茨木市農業祭 (茨木市, 小豆島町, まめまめびーる, 小豆島手延素麺協同組合 他)	●
(11) 10/30_お手伝い企画 - ②豊川小学校との交流会 (茨木市立豊川小学校)	
(12) お手伝い企画 - ③その他地域イベントへの参加 5/18_すくくっ子まつり 5/25_中津コミセンフェスタ 10/4_山手台フェスタ (豊川地区まちづくり協議会, 豊川公民館, 中津コミュニティセンター, 山手台街づくり協議会)	

表2 2025年度プロジェクトの取り組み

なお、こういった企画活動以外にも、「新メンバー募集」「新メンバー対象勉強会の開催」「報告書の作成」といった全体に係る活動も行われている。

以下、各取り組みの概要について簡単に説明する。

(1) コラボビール販売

毎年醸造を継続していたコラボビール「しそとことんシリーズ」であるが、2025年度は新規醸造を行わず2024年秋発売の「しそとことん Saison」を各所で販売することに注力した。新規醸造しなかった理由としては、①前年度分が秋発売であったことでまだ在庫が一定数残っているためそれを売り切ることを優先すべきであったこと、②2025年は「瀬戸内国際芸術祭」の開催年と重なったことで製造受け入れをしていただいているまめまめびーが春・夏の時期に多忙となられたこと、の2点が主なものとなる。

また、ビール醸造が無かったため、例年開催する「しそちぎりワークショップ」も実施していない。

●茨木蚤の市 2025 ～春～ (2025/4/19)

茨木のまちづくり会社「FIC ベース株式会社」が主催するイベントである。FIC ベースには学校法人追手門学院も参画しており、プロジェクトメンバーの一人が学部（地域創造学部）の活動としても関わっていることから、出店につながった。

茨木市文化・子育て複合施設おにクル前にて、コラボビール「しそとことん Saison」を販売し47本の売上があった。(図 01)

●山手台マルシェ (2025/5/10)

茨木市山手台地区住民の方からの参加打診があり、コラボビール販売を行った。山手台街づくり協議会と茨木商工会議所などが主体となって開催されているイベントである。

地域の幼稚園の駐車場で開催され、ビール売上は16本であった。(図 02)

●駅前マルシェビアガーデン (2025/7/12)

先述した「蚤の市」と同じく FIC ベース主催イベントで、ビール販売出店の依頼を受けて参加した。会場は JR 茨木駅東口の広場・いばらきスカイパレットであり、電車利用者の目に留まる場所となる。ビールの販売と併せて、姉妹都市テーマの簡単なゲームを行い、子連れ家族などにもアピールした。

ビール売上は31本、また、購入者にはビールや姉妹都市や小豆島についてのメッセージカードにコメン

トをいただくなどの工夫を行った。メッセージカードには以下、様々なコメントが寄せられた。(図 03)

▽すっきりとした味、おいしかったです

▽ラベルのデザインがかわいらしい

▽明るいステキな島です

▽学生さんのプロジェクト大好きです、応援しています

●教職員限定コラボビールお渡し会 (2025/7/14-15)

大学内にてアルコール提供や販売をしないで、コラボビールに触れてもらう機会を何かの形で作れないかとの思いで検討を進めた。

取扱酒店の協力を得て、購入フォームを準備していただき、事前購入いただいた大学教員・職員のみを対象に、商品のお渡しだけを大学でイベント的に実施した。持ち帰りのみで、学内での開栓はもちろん NG となっている。

会場は校舎1階のオープンなエリアとし、活動パネルの展示やメンバーによる活動紹介を併せて行い、プロジェクトの学生の顔を見ていただく機会となった。

お渡し会に足を運んでもらった教職員には簡易なアンケートを実施した。以下は感想コメントの抜粋である。(図 04)

▽学生のみなさんが小豆島に愛着を持っていることが感じられた

▽良い取り組みなので、全学的に波及させていってもよいのではと考えます

▽教職員も観覧に購入できる今回の機会は、学生の声を聞くこともでき、非常に良かった

●かどや酒店有料試飲会 (2025/9/21)

茨木市内でのコラボビール販売で毎回お世話となっている酒店「かどや酒店」の店頭での有料試飲会をメンバーが企画し、実施させていただくこととなった。

330mlの半分の量をミニカップで販売する形となり、気に入った方には瓶で購入いただいた。

最終的に瓶50本分を販売することができ、併せて姉妹都市 PR も行った。(図 05)

(2) オリーブフレンドリーキャンプ (2025/8/5)

姉妹都市である茨木市と小豆島町、両都市の小学生を対象とした交流事業の中の「大学訪問プログラム」の依頼を茨木市から受けて2023年度より実施している。



図01 茨木蚤の市の様子（撮影：小豆島プロジェクト）



図04 コラボビールお渡し会の様子
（撮影：小豆島プロジェクト）



図02 山手台マルシェの様子（撮影：小豆島プロジェクト）



図05 かどや酒店有料試飲会チラシ
（作成：小豆島プロジェクト）



図03 駅前マルシェビアガーデンでのメッセージボード
（撮影：小豆島プロジェクト）

本年度も本学研究企画課を通じて依頼があり、夏休み期間を活用して開催された。

なお、本年度より呼称が「いばらきフレンドリーキャンプ」から「オリーブフレンドリーキャンプ」と変更されている。

小豆島町と茨木市の小学6年生、合わせて約30名が来学した。実施にあたっては、本学の学生プロジェクトのひとつである「追大パーク」とも連携し、他団体の学生と協力しながら企画運営にあたったことが、前年度までとの大きな違いとなる。追大パークは子どもの居場所づくりに取り組む団体であることから、子ども向けのゲームや対応については経験値が高く、様々なアドバイスやアイデアをもらえたことは、小豆

島プロジェクトの学生にとっても大きな学びになった。

プログラム全体のテーマは「食育」であり、食や姉妹都市に関連したゲームやクイズを大学生と一緒にチャレンジしながら、食材カードを集め、最終的に「姉妹都市コラボランチメニュー（例：ふわふわだし巻きサンド）」が完成する趣向となっていた。コラボメニューは、過去にプロジェクトで実際に実現したものを活用し、子どもたちには各メニューのレシピを持ち帰ってもらった。

会場となった建物は、2025年春からオープンしたばかりの新校舎であり、ハンモックや芝生スペースなどのユニークな空間が点在する新校舎を存分に活用した内容となった。

またイベント担当は後輩メンバーである7期生（2年生）に任せられており、7期生にとっては同期で協力して取り組む初めての大きなイベントであり、同期生の絆が深まる機会ともなった。

参加した小学生の感想コメントは以下の通りで、小学生たちの思い出に残るプログラムとなったようである。（図06、図07）

- ▽大学に行って食材さがしをしました。それがすごくおもしろかったです
- ▽クイズがたのしかった
- ▽とってもおいしそうなお卵サンドの材料（レシピ）をもらって、家でも作ってみたいと思いました

（3）茨木市への訪問・ヒアリング（2025/8/25）

茨木市まち魅力発信課を訪問し、茨木市の知識や魅力スポットについてヒアリングした。この訪問は、8期生（1年生）が茨木市について学ぶ機会としても位



図06 野菜を模したゲーム&クイズを楽しむ小学生
（撮影：小豆島プロジェクト）

置付けており、ヒアリングの内容は後に、プロジェクトの新しい広報紙「SIO NEWS vol.2 茨木市編」にも反映されている。

（4）瀬戸内国際芸術祭視察（2025/8/27-28）

「瀬戸内国際芸術祭（略称：瀬戸芸）」は、小豆島を含む瀬戸内の島々を会場として3年に一度の頻度で開催されている国際的な芸術祭である。プロジェクトの初代メンバーは2016年に開催された瀬戸芸を訪問してレポートを作成しており、プロジェクトと瀬戸芸は縁が深い。その後しばらく瀬戸芸を訪問する機会は無かったが、今回、久しぶりに瀬戸芸でのフィールドワークを実施することができた。

島に多数点在するアート作品のうち、何を見るか、どのように回るか、移動をどうするか、など島訪問の経験が少ないメンバーで計画することは苦労や不安もあったようだが、最終的にはメンバーの意見をうまく収集し、コースを選定した。このフィールドワークには6期生・7期生（2～4年生）が全員（13名）参加しており、メンバー間の交流を深めるいい機会にもなった。さらに、4年生メンバーが「旅のしおり」をデザイン・制作して、後輩たちにサプライズで贈るといった粋な計らいもあった。

参加した学生メンバーからは以下のような熱のこもった感想コメントが多数寄せられ、瀬戸芸を通じて、新たな小豆島の魅力や自分自身の気づきに出会えたのではないかと思う。（図08、図09）

- ▽小豆島の広い範囲で行動できて、存分に満喫できた
- ▽瀬戸芸の作品は自然と融合しており、街に溶け込んでいる芸術という印象
- ▽芸術祭を実際体験すると、自分と同じ世代の観光客



図07 集めた食材カードでメニューを完成させる
（撮影：小豆島プロジェクト）

も多く訪れていると気付いた
 ▽訪れている人は若年層や外国人観光客が多く、さらなる活性化が見込めると感じた
 ▽島を巡る中で、たくさんの親切に助けられた
 ▽島の方々の小豆島に対する愛が大きいと感じた
 ▽(いつもお世話になっている島の人に) 実際に会ってお話する機会ができ、貴重な時間だった
 ▽6期7期メンバー全員で訪問できて、仲間の新しい一面を知る機会になった
 ▽目的を持ちつつ島訪問を楽しむ気持ちを8期生や今後の後輩に伝えていきたい



図08 瀬戸内国際芸術祭のアート作品
 (撮影：小豆島プロジェクト)



図09 瀬戸内国際芸術祭のアート作品
 (撮影：小豆島プロジェクト)

(5) 小豆島秋祭りへの参加 (2025/10/14-16)

I章に記載した通り、プロジェクトのゴールのひとつ

は【小豆島秋祭りへの参加】であるが、2023年度にメンバー1名が担ぎ手として参加させていただいたことは、過去にも報告している。

本年度も秋祭りの時期に訪問することを決め、嬉しいことに地元の方から祭(の担ぎ手)への参加のご承諾をいただいた。秋祭り参加を成し遂げた先輩メンバーの思いを引き継いで、6期生の男子メンバー1名が歴代二人目の担ぎ手として参加した。

最初は、何時間も重い太鼓台を担ぎ続けられるのか、不安を感じていたメンバー(担ぎ手)だったが、一緒に担いだ島の方や香川大学の学生と交流していくうちに、不安は徐々に和らいだようである。次第に、太鼓台を支えている人々と「思いを一緒に分かち合えたような気持ちになった」と以後に述べており、島での秋祭りの存在の大きさを体感できた訪問であった。

他の同行メンバーからは次のような報告コメントが寄せられており、担ぎ手のメンバーに対しても、祭や島に対しても、それぞれ様々な感動や決意を得る機会となったようだ。(図10)

▽衣装の色が変わるくらい汗をかき一生懸命に担いでいる姿にとっても感動した
 ▽今回の参加を通して感じたことや学んだことを、多くの人に伝えていくことが大切だと感じた



図10 秋祭りの様子 (撮影：小豆島プロジェクト)

(6) 「わたしのみらいゼミ」との交流 (2025/10/20)

オンラインスポーツ大会でお世話になっているサンシャイン会の川西氏の紹介により、小豆島中央高等学校で実施している「わたしのみらいゼミ」で高校生との交流する機会を設けていただいた。

メンバー4名が訪問し、プロジェクトや大学生生活のリアルについて、プレゼンを実施し、その後、質疑な

どを交えながら高校生との交流を行った。

小豆島中央高等学校で実施されている「わたしのみらいゼミ」は“島のことを知り、地域や世代を超えた交流体験を行う”もので、主に放課後の時間を活用して、希望する高校生が参加している。今回は6名の高校生が参加し、メンバーと交流を行った。(図 11)



図 11 小豆島中央高等学校での交流の様子
(撮影：小豆島プロジェクト)

(7) しまはらさん企画

「しまはらさん企画」と呼ばれる本企画は、過去の在籍メンバーからのつながりで交流が続いている小豆島の島原氏のご協力や紹介で行う企画全般である。

体験や展示を通じて、茨木市と小豆島の二つの都市の魅力をも市民・島民に伝えていこうとするもので、過去には、島の子どもたちとの交流イベントなども実施した。

●茨木市内フィールドワーク (2025/10/25)

今年度は、茨木市の魅力を小豆島や茨木市民にもっと伝えるための材料を集めるべく、市内フィールドワークで現地に足を運び、それらを整理して手描きマップとしてまとめる活動を行った。

訪問先は「ダムパークいばきた」「茨木市立川端康成文学館」「茨木市立キリシタン遺物史料館」となっており、学生が実際に体験・見学して感じたことをイラストや写真を使ったマップに仕上げた。

マップは11月の茨木市農業祭のブース内で展示して来場者に見ていただいた。今後も機会があれば展示・活用していく予定である。(図 12)

(8) 姉妹都市コラボランチ

2022年度から取り組む、小豆島と茨木の食材を使った、地産地消のコラボメニューを考案する企画である。



図 12 完成した魅力マップ
(撮影：小豆島プロジェクト)

2025年度は前2024年度と同じく「有限会社藤熊食品(茨木市)」の協力を得て「練り天」を商品化した。前年度は1種類であったが、今回は2種類となっており、1つは「丸虎食品工業(小豆島)」のラー油きくらげを使用した「ラーきく練り天」、もう1つは「実都農園(小豆島)」のグリーンレモンを使用した「塩レモン練り天」である。

前年同様に、企画を考えただけでなく、藤熊食品の工場を休日にお借りして、現場で指導いただきながら、ねり天を材料から製造した。11/29-30に開催された茨木市農業祭のブースでは、現地で揚げたてを販売し、二日間で約320個を完売することができた。どちらの商品も、購入した方から好評であった。(図 13)



図 13 ラーキく練り天 (撮影：小豆島プロジェクト)

(9) オンラインスポーツ大会

茨木市および小豆島の多世代交流の促進を目的に、継続的に開催しているオンラインスポーツ大会であるが、本年度は、茨木市の福祉施設の新規開拓と前年度にアプローチした茨木高等学校との開催を視野に入れて取り組みを進めていった。

まず福祉施設の新規開拓については、5月に参加した茨木市豊川地区のイベント「すくくっ子まつり」にて、市内の福祉施設「常清の里」を紹介いただけたことで、訪問・活動紹介を経て、【小豆島プロジェクトの学生 vs. 常清の里】の対戦（2025/11/18）を実現することができた。

茨木高等学校については、訪問（2025/6/25）して交流&調整を進め、1月に【茨木高等学校 vs. サンシャイン会（小豆島）】の対戦を開催する段取りを整えたのだが、事情により高校側の都合がつかなくなったことで、最終的に【小豆島プロジェクトの学生 vs. サンシャイン会】の対戦に変更して実施した（2026/1/17）。

対戦内容の競技は手先を使う簡単なものであるが、輪投げの輪の大きさを変えて学生と高齢者の難易度を均したり、身体を動かさず競技だけでなく視覚を使ったもの（四つ葉のクローバー探しなど）を取り入れたりするなど、毎回様々な工夫を凝らしている。

今後は、茨木の高齢者と小豆島の高校生をつなぐパターン、延期となった茨木高等学校との開催など、引き続き積極的に取り組んでもらえればと考える。（図14、図15）

(10) お手伝い企画 - ①茨木市農業祭（2025/11/29-30）

プロジェクト主催ではなく、地域の各所からお声かけいただきイベントに参加する案件を「お手伝い企画」と名付けている。

その中でも継続的に参加しているものが、茨木市主催の“都市と農村の交流イベント”と位置付けられた「茨木市農業祭」である。本年度も出店・出展参加できることとなり、これで通算4回目となった。

茨木市役所の向かいにある中央公園グラウンドで、土日二日間に渡って開催され、姉妹都市の茨木市と小豆島町から多くの出店・出展があり、市民来場者で賑わうイベントである。

プロジェクトは「①ブース出展（パネル展示、クイズ企画）」「②小豆島町出店ブース企業の手伝い」「③飲食の提供（練り天販売）」「④ステージイベント手伝い（福引）」を行った。



図14 常清の里とのオンラインスポーツ大会
（撮影：小豆島プロジェクト）



図15 サンシャイン会とのオンラインスポーツ大会
（撮影：小豆島プロジェクト）

①で「プロジェクト新聞」と呼ぶメンバーが作成した壁新聞的レポートをパネル化して展示するのは前年度同様で、新しく制作された号を中心に掲示を行った。併せて、本章（7）に記載した、手描きの茨木市魅力マップのポスター展示も行っている。

②ではオリーブや醤油会社、素麺組合など、小豆島から来販している企業ブースの販売活動の手伝いを行った。（1）に登場するまめまめびーによる小豆島のビール販売も行われた。③では（8）に記載した地産地消メニューである「練り天」を2種、調理販売した。（図16、図17）

(11) お手伝い企画 - ②豊川小学校との交流会（2025/10/30）

5月に参加した「すくくっ子まつり（茨木市豊川地



図 16 農業祭の様子 (撮影：小豆島プロジェクト)



図 18 すくくっ子まつりの様子 (撮影：小豆島プロジェクト)



図 17 農業祭の様子 (撮影：小豆島プロジェクト)



図 19 中津コミセンフェスタの様子 (撮影：小豆島プロジェクト)

区)」との出会いから、同地区の豊川小学校とのご縁が生まれ、交流会（10/30）に呼んでいただいた。

対象は小学2年生で、姉妹都市をテーマにした〇×クイズやパズル、魚釣りゲームを行い、小豆島のことを楽しく知ってもらう機会とした。

学生メンバーからは以下のようなコメントがあり、小学生を巻き込んだ世代交流を広げていければと考えている。

▽この交流会の話を家に帰ってから親御さんに話してもらえたら嬉しい

▽一度きりで終わらずに今後も豊川小学校と交流を続けたい

(12) お手伝い企画 - ③その他地域イベントへの参加

●すくくっ子まつり (2025/5/18)

地域からのお声かけで地元のお祭りに参加させていただいた。会場は茨木市の豊川小学校運動場である。ここでは姉妹都市テーマでミニゲームなどを実施したが、そこで配布する景品については地元の子ども食堂



図 20 山手台フェスタの様子 (撮影：小豆島プロジェクト)

から寄付でのご提供があった。プロジェクトの取り組みに賛同いただけたとのことで、学生にとっても大変ありがたいお申し出であった。このお祭りでの出会いは、その後、オンラインスポーツ大会や小学生との交流会など、新しい出会いに発展していった。(図18)

●中津コミセンフェスタ (2025/5/25)

こちら地域のお声かけで参加することとなったイベントである。その名の通り、茨木市の中津コミュニティセンターで行われた。模擬店や展示などが多数の出店・出展があり、プロジェクト新聞の展示もさせていただいた。また、模擬店のお手伝いをして住民の方と交流し、活動や姉妹都市の周知に奮闘した。(図19)

●山手台フェスタ (2025/10/4)

5月にコラボビール販売で出店した「山手台マルシェ」のご縁から、再度地元からお声かけいただいたイベントである。

今回はビールではなく「姉妹都市PR活動」に注力し、プロジェクト新聞の展示や姉妹都市クイズなどを実施すると併せて、簡単なシール貼りアンケートを取りながら、姉妹都市の認知度を調査した。

様々な世代の方が来場する比較的大きめのイベントであり、これまでのイベント参加で蓄積してきたツールやアイデアなどを活用する場になった。(図20)

2-3. 広報活動ツール

2025年度に制作した広報ツールおよびグッズは以下である。新たなニュースペーパーの発行やオリジナルキャラクターづくりなど、世代や場面での使い分けも意識し、工夫しながら意欲的に取り組んでいる。

(1) プロジェクト新聞

※プロジェクト新聞：活動を紹介するA4サイズ2-4ページ程度の壁新聞風レポート。企画ごとに担当学生が製作にあたり、各種イベントでの配布・展示、外部の方への説明資料として使用している。

- ① 2024 しそとこ Saison 編
(コラボクラフトビールの報告)
- ② 2024 姉妹都市コラボランチ編
(姉妹都市オーリーブ練り天ポップ)
- ③ 2024 茨木市農業祭編
- ④ 2024 しまはらさん企画編

- (小豆島の高校生との交流報告)
- ⑤ 2024 オンラインスポーツ大会編
- ⑥ 2025 小豆島小学6年生追大訪問企画編
(オーリーブフレンドリーキャンプの報告)
- ⑦ 2025 秋祭り編 (図21)



図21 プロジェクト新聞 最新号 (作成：小豆島プロジェクト)

(2) SIO NEWS

小中高校生など、子ども向けの広報物として新たに登場したのが「SIO NEWS」である。内容は、小豆島・茨木市について、プロジェクトが関わったものや場所を交えて紹介するもので、小豆島編がvol.1、茨木市編がvol.2となっている。各種イベントで印刷して配布したり、ポスター展示をしたりして活用している。(図22)



図22 SIO NEWS 左から vol.1 vol.2 (作成：小豆島プロジェクト)

(3) おりいばくん

今期、プロジェクトの公式キャラクター「おりいばくん」が誕生した。これまで様々なイベントでお世話になっている両都市のキャラクター「オリーブしまちゃん（小豆島）」と「茨木童子（茨木市）」にインスパイアされた造形で、オリーブのような丸っこい顔に茨木童子からイメージした鬼の角帽子と金棒を身につけたゆるキャラである。学生メンバーによれば、語尾に「～まめ」と付けて話す設定とのことだ。

「おりいばくん」のネーミングは、メンバーで募集したものから候補を絞り込み、最終的にかどや酒店での有料試飲会のイベントでお客さんに投票をしていただき決定した。オリーブの「おり」と茨木の「いば」からできているのと言うまでもない。

瀬戸芸訪問の旅のしおりでデビューを果たし、その後も各種イベントでお面やぬりえやステッカーとなってフル活用されている。

次年度以降も様々な場面で、姉妹都市 PR に一役買ってくれることが期待される。(図 23)



おりいばくん
小豆島プロジェクト公式キャラクター

図 23 おりいばくん
(©小豆島プロジェクト)

2-4. メンバー募集

(1) 1次募集

8期生の募集にあたっては、前年同様に、学生メンバーらが地域創造学部1年生の授業でプロジェクト説明プレゼンを行い(2025/4/25)、それをプロジェクトのSNSで発信した。成熟研の方では、大学のアプリを通じて1年生を対象に募集案内を一斉配信すると併せて、学内サイネージに掲出する形でサポートした。

6月上旬に募集を締め切り、応募のあった5名については現役メンバーが個別にオンライン面談を行い、最終的に3名の男子学生(1年生)が6月下旬から参加することとなった。これまでプロジェクトメンバーは全体的に女子が多く、男子だけの学年というのは初

めでであった。このことは何か新しい風をプロジェクトにもたらしてくれるかもしれないと、期待するメンバーもいた。

例年記載しているが、成熟研(教職員)はメンバー面接に関してはノータッチであり、結果報告を受けるのみとしている。誰を選ぶか、何を基準にするのか、何人選ぶか、という判断は全て現役メンバーに委ねている。

なお、面接は通常「しそぢりワークショップ」の会場で同時開催されているが、今期はビール作りが無かったことでワークショップが行われておらず、面談をオンラインのみに変更した。ただ、やはり対面で話をしてみて感触をつかみたいという声は、学生メンバーからもちらほらと聞かれた。(図 24)

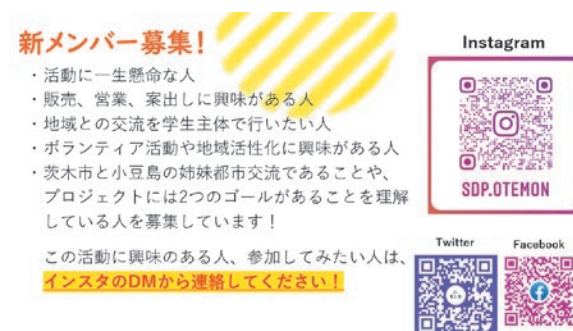


図 24 新メンバー募集のサイネージより

(作成：小豆島プロジェクト)

(2) 2次募集

通常募集時期(春)の応募数が、例年より少なかったことで、夏休み後半に2次募集を行うことを決定した。ただ、秋学期の授業期間に入る前に応募締切としたことで(秋以降の活動の関係による)、期待した応募はなく、最終的に2次募集で加入したメンバーはいない。次年度の募集をどう工夫していくかは検討課題として残った。

2-5. 新メンバー対象勉強会の実施

7月から8月にかけて、新規加入したメンバーを対象に、プロジェクトのこれまでを学ぶオンライン勉強会が実施される。過去のメンバーが作成した年度末報告書を読み込んでプロジェクトの経緯や目的などを理解し、自分事にしていくことが目的である。

今期は全7回の勉強会を実施、その内容を受けて新入生たちはプレゼン資料を協力して取りまとめ、発表練習を行った。その後、11月に成果発表会(2025/11/7)がオンライン開催された。

なお、学生は授業やアルバイトなどの都合もあり集まるのは夜遅い時間が定番のようで、今回の発表会も平日夜の23時スタートとなっている。

発表会には、先輩メンバーに加え、OBメンバーも複数都合をつけて参加してくれている。今回は筆者も初めて発表会に参加し、1年生3名が苦労してまとめあげた1時間を超えるプレゼンを聞かせてもらった。

プロジェクトの活動が毎年積みあがっていくのと同時に、この勉強会で学ぶ内容は1年分ずつ増えていく。2016年からスタートした10年分の膨大な活動の軌跡は、伝える方も伝えられる方も大変であったと推察する。勉強会という形で、先輩たちの活動をしっかりと継承している学生メンバーには頭が下がる思いである。

Ⅲ. プロジェクトの成果と期待

2025年度のプロジェクトの成果とそこからの生まれる期待について、以下4つのキーワードで振り返っていききたい。

「多世代交流」 「地域との対話」

「主体性」 「継承」

(1) 多世代交流

茨木市と小豆島の両地域において、小学生から高齢者までを巻き込んだ多世代交流を複数実現することができた。小学生対象の「オリーブフレンドリーキャンプ」では、姉妹都市の魅力発信と併せて大学を身近に感じる体験の場を創出した。また、高齢者施設との「オンラインスポーツ大会」や高校生との交流会を通じ、世代を超えて「元気な時間」を共有できたことは、福祉・教育の側面からも意義深いのではないかと。

単なるイベント実施に留まらず、各世代のニーズに合わせた交流の場を提供できたことは、姉妹都市の認知度向上と併せて、地域コミュニティの活性化にも寄与したと言える。

今後も小学生、中高生、親子、高齢者など様々な世代間の架け橋となりながら、一度いただいたご縁も大切につなぎ続けてもらいたい。

(2) 地域との対話

これまでの最多となる、計7回に及ぶ地域イベント(2-2. (1) (10) (12) 参照)への参画は、地域や地元企業、行政と「顔の見える関係」を構築することにつ

ながった。特に、外部イベントでのビール販売とお手伝い企画には、「出展・出店してほしい」という依頼をいただいたものが多い。今まではプロジェクトを知っていただく活動を地道に続けていたが、徐々にプロジェクトが「外部から必要とされる存在」へと成長しているのである。

また、茨木市内のイベントに多数関わり、多様な参加者と対話できたことも、今期の特徴である。特に豊川地区のすくくっ子まつりをきっかけに、豊川小学校や常清の里といった新たなつながりが生み出されており、地域イベント参加と住民とのコミュニケーションを通じて活動を発展させられたことは、学生メンバーに、対話と交渉の力がしっかりと根付いてきていることを感じる。

(3) 主体性

一年を通じて大小20を超える多様な企画において、学生たちは自ら考え、行動し、道を切り拓く姿勢で取り組んでいる。成熟研は、原則アドバイスや学内手続きをサポートするのみで、やるやらないに関して口を出すことはせず、判断はプロジェクトの学生に任せることを基本としている。

主催企画にしても、参加型(お手伝い系)企画にしても、やるかやらないか、受けるか受けないか、どんな内容にするか、何が必要か、誰が分担するか、など、考えて決めなければならない無数の事項には、学生自身が向き合い、一つずつクリアにしていった。

その中で「自分たちがやりたいことをやる」だけではなく、「来年度も声をかけていただけるように」という責任感を持ち、しかし自分たちがちゃんと楽しむことも忘れずにいる。現場で困難に遭うことも多いが、企画グループの枠や学年の壁を超えて相談協力しながら、全ての企画を完遂させた。

こうして主体的にプロジェクトを推進した経験は、社会で生きる大きな財産となるはずである。

(4) 継承

夏に実施した「オリーブフレンドリーキャンプ」は、7期生(2年生)中心の運営体制を敷いていた。7期生にとっては初めての大きなイベント運営でもある。その中で、上級生が下級生を信頼し、任せて託している姿が印象的だった。

また、小豆島での秋祭り参加では、卒業した先輩たちの想いを背負い、担ぎ手不足という地域の課題解決に貢献することで、伝統文化を守る一助を担った。単

年度の活動に終わらず、過去からのバトンを受け取り、未来へ繋ぐという「継承」のプロセスを学生自身も強く意識した1年であったのではないか。

2025年度は「追手門学院大学に小豆島プロジェクトという活動がある」ということを広く知らせ、また知られていっていることを実感できた年度であったのではないだろうか。

もちろん、まだまだ一般的な認知度が高いとは言えないのだが、茨木市や地域団体の側から声がかかる存在になってきたことは、これまでの取組みが評価され、地域に求められる活動を還元できている、つまりは「地域社会から必要とされる存在」に成長してきていることの証と考える。

学生メンバー側も大きな自信を得て活動意義を感じたであろうし、プロジェクトをやってよかったと思える経験になったであろう。この思いと経験が、さらに次の学年に、そしてこれから入学してくる学生たちに、継承されていくことを願ってやまない。

最後に、小豆島プロジェクトの活動を支援・応援いただいている小豆島と茨木市の連携先、大学関係者、協力者、卒業したプロジェクトOB・OGの皆様、この場を借りて御礼を申し上げたい。引き続き学生たちを応援いただければ幸いです。

参考文献

- 中川啓子 (2017). 「学生チームによる小豆島調査」『追手門学院大学成熟社会研究所紀要 第1号』
- 中川啓子 (2021). 「学生チームによる小豆島プロジェクトの活動記録」『追手門学院大学成熟社会研究所紀要 第5号』
- 中川啓子 (2022). 「学生チームによる『小豆島プロジェクト』6年目の進化と変化」『追手門学院大学成熟社会研究所紀要 第6号』
- 中川啓子 (2023). 「学生チームによる小豆島プロジェクトの活動報告 2022」『追手門学院大学成熟社会研究所紀要 第7号』
- 中川啓子 (2024). 「学生チームによる小豆島プロジェクトの活動報告 2023」『追手門学院大学成熟社会研究所紀要 第8号』
- 小林史門 (2024). 「小豆島プロジェクトでの活動を振り返って」『追手門学院大学成熟社会研究所紀要 第8号』
- 中川啓子 (2025). 「学生チームによる小豆島プロジェクトの活動報告 2024」『追手門学院大学成熟社会研究所紀要 第9号』

成熟社会研究所の事業

研究所として2025年度に取り組んだ主な事業（プロジェクト）は、以下の3つである。

<p>地域連携・交流事業 小豆島プロジェクト (産学官連携活動)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・茨木蚤の市 2025～春～参加（ビール販売） ・山手台マルシェ参加（ビール販売） ・すくくっ子まつり参加（姉妹都市 PR） ・中津コミセンフェスタ参加（姉妹都市 PR） ・茨木高校との交流会 ・駅前マルシェビアガーデン出店（ビール販売） ・教職員対象ビールお渡し会 ・「オリーブフレンドリーキャンプ」大学訪問プログラム企画 ・瀬戸内国際芸術祭（小豆島）を訪問 ・かどや酒店での有料試飲会 ・山手台フェスタ参加（姉妹都市 PR） ・小豆島・秋祭り参加（神輿担ぎ手） ・小豆島中央高校を訪問（活動発表） ・豊川小学校との交流会 ・茨木市まち魅力発信課訪問ヒアリング ・オンラインスポーツ大会 (対戦先＝第1回：常清の里 [茨木市], 第2回：サンシャイン会 [小豆島]) ・地産地消「練り天」企画販売 (ラーきく練り天, 塩レモン練り天) ・茨木市農業祭への出展参加 	<p>参加型研究会の開催 シェアラボ・授業共催企画 冒険者たちシリーズの開催 (学生向け講演会)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シェアラボの理念を継承する授業との共催企画を2回（2回目は授業2回に亘って開催）実施 ▼ 7/1 現代企業論Aにおいて、発酵室よはく店主/料理家・真野遥氏の講演・対談 ▼ 10/10 食農とサステナビリティにおいて、探検家/医師・関野吉晴氏監督の作品「うんこと死体の復権」上映会 ▼ 10/17 食農とサステナビリティにおいて、探検家/医師・関野吉晴氏の講演・対談
<p>その他 白い羽根プロジェクト (社会課題解決)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生チームが「生理の貧困」という社会課題の解決を目指し、大学のトイレへの生理用品設置に取り組んでいる ▼ 1/7_ 経済学部 男女共同参画社会論とのコラボ企画として、「生理」「ジェンダー」のテーマに取り組む大阪大学大学院生の谷本成星氏の講演 	

成熟社会研究所 活動報告

○：イベント・講座・講演 ◆：学生研究員による活動 ●：打合せ □：その他

2025	4.1	●成熟社会研究所 所員会議（新年度の取り組みについて）
	4.19	◆○小豆島プロジェクト 茨木蚤の市 2025～春～参加 於：茨木市中央公園グラウンド他
	4.25	◆小豆島プロジェクト プロジェクト紹介プレゼン（地域づくりと環境：地域創造学部・今堀洋子准教授） 於：総持寺キャンパス
	5.10	◆○小豆島プロジェクト 山手台マルシェ参加 於：サニー幼稚園駐車場（茨木市）
	5.18	◆○小豆島プロジェクト すくくっ子まつり参加 於：豊川小学校運動場（茨木市）
	5.25	◆○小豆島プロジェクト 中津コミセンフェスタ参加 於：中津コミュニティセンター（茨木市）
	6.20	◆小豆島プロジェクト 第8期生の加入
	6.25	◆○小豆島プロジェクト 茨木高等学校との交流会 於：茨木高等学校
	7.1	○シェアラボ共催企画×現代企業論A [経営学部・神吉直人准教授]（講師 発酵室よはく店主・料理家 真野遥氏） 於：総持寺キャンパス
	7.12	◆○小豆島プロジェクト 駅前マルシェビアガーデン出店 於：JR 茨木駅東口 駅前広場
	7.14-15	◆○小豆島プロジェクト 教職員限定コラボビールお渡し会 於：総持寺キャンパス
	8.5	◆○小豆島プロジェクト オリーブフレンドリーキャンプ（食育テーマの小学生向け大学紹介プログラムの企画運営/主催：茨木市教育委員会 社会教育振興課） 於：総持寺キャンパス
	8.25	◆小豆島プロジェクト 茨木市訪問ヒアリング 於：茨木市まち魅力発信課
	8.27-28	◆○小豆島プロジェクト 瀬戸内国際芸術祭のフィールドワーク 於：小豆島
	7-8月	◆○小豆島プロジェクト オンライン勉強会の開催（8期生向け/全7回）
	9.21	◆○小豆島プロジェクト コラボビール有料試飲会& PR 活動 於：かどや酒店（茨木市）
	10.4	◆○小豆島プロジェクト 山手台フェスタ参加 於：山手台中央公園グラウンド（茨木市）
	10.10	○シェアラボ共催企画×食農とサステナビリティ [地域創造学部・今堀洋子准教授] 映画『うんこと死体の復権』（監督 関野吉晴）映像上映会 於：総持寺キャンパス
	10.14-16	◆○小豆島プロジェクト 秋祭り訪問&神輿参加 於：小豆島坂手地区他
	10.17	○シェアラボ共催企画×食農とサステナビリティ [地域創造学部・今堀洋子准教授]（講師 探検家・医師 関野吉晴氏）講演会 於：総持寺キャンパス
	10.17	●成熟社会研究所 所員会議（秋学期からの取り組みについて）
	10.20	◆○小豆島プロジェクト 小豆島中央高等学校「わたしのみらいゼミ」交流会 於：小豆島中央高等学校
	10.25	◆○小豆島プロジェクト 茨木市内魅力マップ製作のためのフィールドワーク 於：茨木市内
	10.30	◆○小豆島プロジェクト 豊川小学校との交流会 於：豊川小学校（茨木市）

	11.7	◆○小豆島プロジェクト	8期生企画成果発表会（オンライン）
	11.18	◆○小豆島プロジェクト	オンラインスポーツ大会（共催：高齢者総合福祉施設 常清の里/茨木市内） 於：総持寺キャンパス
	11.23	◆○小豆島プロジェクト	姉妹都市コラボランチ企画「練り天 2種（ラーさく練り天, 塩レモン練り天）」製造 於：藤熊食品
	11.29-30	◆○小豆島プロジェクト	於：茨木市農業祭 パネル展示・ブース手伝い・コラボメニュー「練り天」の販売（於：茨木市中央公園グラウンド/協力：茨木市文化振興課・北部整備推進課, 小豆島町商工観光課, 小豆島手延素麺協同組合 等）〔農業振興×市民活動推進枠〕
2026	1.7	◆○白い羽根プロジェクト×男女共同参画社会論	[経済学部・長町恵理子教授]（講師 大阪大学大学院 谷本成星氏） 於：総持寺キャンパス
	1.17	◆○小豆島プロジェクト	オンラインスポーツ大会（共催：小豆島社会福祉法人サンシャイン会） 於：安威キャンパス
	2.13	◆小豆島プロジェクト	メール講習会（8期生向け）
	3.11	◆○小豆島プロジェクト	2025年度 WIL AWARDS 成果報告会参加 於：総持寺キャンパス
	3.31	□成熟社会研究所 紀要 10号の発行	
(通年随時)		◆小豆島プロジェクト	各プロジェクトに係るミーティングの実施



小豆島プロジェクト
(すくくっまつり参加)
2025.5.18



小豆島プロジェクト
(教職員限定コラボビールお渡し会)
2025.7.14-15



小豆島プロジェクト
(オリーブフレンドリーキャンプ)
2025.8.5



小豆島プロジェクト
(小豆島中央高等学校「わたしのみらいゼミ」交流会)
2025.10.20



小豆島プロジェクト
(オンラインスポーツ大会)
2025.11.18



小豆島プロジェクト
(茨木市農業祭参加/
姉妹都市コラボランチ販売)
2025.11.29-30



シェアラボ共催企画×
現代企業論 A
2025.7.1



シェアラボ共催企画×
食農とサステナビリティ
(映像上映会)
2025.10.10



シェアラボ共催企画×
食農とサステナビリティ
(講演会)
2025.10.17



白い羽根プロジェクト×
男女共同参画社会論
2026.1.7

公開講義

追手門学院大学
成熟社会研究所

シエラボ × 現代企業論A

SHARE LAB.

講演&インタビュー(聞き手:神吉直人/経営学部)

ゲストスピーカー
真野 遥 さん
[発酵室よはく] 店主・料理家

発酵&独立 編

2025.7.1(火) 4限
16:00-17:45

会場: 総持寺アカデミックベース4階
BNC410教室

シエアラボ共催企画×現代企業論 A
2025.7.1 サイネージ

ドキュメンタリー映画

10/17講演ゲスト
関野 吉晴 氏 (探検家・医師)
映画「うんこと死体の復権」監督

うんこと
死体の
復権

上映会 10/10(金)9:30-11:15
講演会 10/17(金)9:30-11:15

シエラボ × 食農とサステナビリティ
いのちの循環 編 地域創造学部 今堀洋子

会場: 総持寺アカデミックベース2階
BNC211教室

シエアラボ共催企画×食農とサステナビリティ
2025.10.10, 10.17 サイネージ

追手門学院大学

どなたでも参加可
申込不要

経済学部 男女共同参画社会論 × 成熟社会研究所 追大白い羽根プロジェクト

生理の課題と「男性」はどうつながるの？

生理に関する活動に関わってきた経験をもとに、
男性が生理の課題にどう向き合えるのかを考えます

2026年 1月7日 水 3限 (14:00-15:45)

講師 大阪大学大学院 人間科学研究科
教育文化学研究室 博士後期課程
たにもと なるせ
谷本 成星氏

題意 埼玉大学在学中、「すべての人が過ごしやすいトイレプロジェクト (Spring Up)」に参画。学内トイレの無料の生理用品設置と、男性専用トイレへのサンタリーボックスを設置する活動に関わる。

概要

- ・大学トイレに生理用品を設置する意義
- ・男性トイレにも生理用品を設置してみたら
- ・「生理」と「ジェンダー」の関係を多角的に考える
- ・「追大白い羽根プロジェクト」について本学学生が報告

会場 追手門学院大学 総持寺キャンパス
アカデミックベース2階 (BNC209教室)

お問い合わせ 総持寺館1階総持寺ホール 151 151
TEL 075-861-3011 (受付時間: 10:00-17:00)

白い羽根プロジェクト×男女共同参画社会論
2026.1.7 チラシ

執筆者紹介（掲載順）

長町理恵子（追手門学院大学 経済学部教授）
今堀 洋子（追手門学院大学 地域創造学部准教授）
神吉 直人（追手門学院大学 経営学部教授）
中川 啓子（追手門学院大学 成熟社会研究所 所員）

追手門学院大学 成熟社会研究所 所員

所 長 神吉 直人（追手門学院大学 経営学部教授）
所 員 今堀 洋子（追手門学院大学 地域創造学部准教授）
所 員 高橋 英之（追手門学院大学 理工学部教授）
所 員 高嶺 翔太（追手門学院大学 地域創造学部准教授）
所 員 長町理恵子（追手門学院大学 経済学部教授）
所 員 神谷 聡子
所 員 中川 啓子
研究員 打田 篤彦（神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 助教）

成熟社会研究所紀要 第10号

2026年3月31日 発行

発行所 追手門学院大学 成熟社会研究所
〒567-8620 大阪府茨木市太田東芝町1番1号
電話（072）665-9217 [研究所・センター窓口]

印刷所 友野印刷株式会社
